

鳥越・七隈古墳群

福岡大学構内におけるグランド造成及び
馬術練習場建設工事に伴う発掘調査報告書

1985

福岡市教育委員会

鳥越・七隈古墳群

福岡大学構内におけるグランド造成及び
馬術練習場建設工事に伴う発掘調査報告書

昭和 60 年 3 月 31 日

福岡市教育委員会

序 文

福岡市の西南部に位置する福岡大学は、私学の雄として発展しつつ今日に至っていますが、同大学の周辺部には、鳥越古墳群・七隈古墳群・片江古墳群をはじめ多くの群集墳があります。その内容については、福岡大学歴史研究部の地道な研究活動により詳しく知ることができます。

本書は、福岡大学の拡充計画にともない構地内の埋蔵文化財調査の報告書として刊行する運びになったものです。

昭和44年・45年・55年の三次にわたる発掘調査の成果を刊行するにあたっては、福岡大学、同大学歴史研究同好会の皆さんをはじめ、関係者の方々の御協力のためまことに感謝致しております。

本書が学術研究の基本的資料としてばかりなく、文化財に対する理解を深めるための一助として広く活用いただくことを願うものです。

昭和60年3月30日

福岡市教育委員会

教育長 西津茂美

例　　言

1. 本書は学校法人福岡大学によるグランド造成工事並びに馬術練習場建設工事に伴って昭和44年度、昭和45年度に福岡市教育委員会と福岡大学歴史研究同好会が主体となり、実施した七隈古墳群発掘調査の記録、及び昭和55年度に福岡市教育委員会が実施した鳥越古墳発掘調査の記録である。
2. 本書に収録した発掘調査は昭和44年度の七隈古墳群5・6号墳の調査を塩屋勝利が、昭和45年度の七隈古墳群8号墳の調査は福岡大学歴史研究同好会が担当した。又、昭和55年度の鳥越古墳E群の調査については井澤洋一が担当した。
3. 本書に掲載した第2章—鳥越古墳E群の遺構・遺物の実測及び写真撮影は、井澤が行ない、整図は児玉健一郎、池田洋子、深堀博子の協力を得た。Fig. 9 の地形測量図は福岡大学歴史研究会の測量図ⁿ¹⁵と今回の地形測量図を合成したものである。

第3章—七隈古墳群5・6号墳関係の遺構実測図と写真撮影は塩屋、折尾学によるものであり、遺物の実測は力武卓治が行なった。又、写真撮影は塩屋、力武が行ない、実測図の整図は塩屋が担当した。第8号墳の遺構の実測は、福岡大学歴史研究同好会によるもので、写真撮影は田坂美代子が担当した。遺物整理・整図は長野卓司、桑田和義、木太久守が行なった。

4. 本書の執筆分担当は次のとおりである。

- 第1章 第1節 井澤洋一
第2節 塩屋勝利、井澤洋一
- 第2章 鳥越古墳群
第1節 井澤洋一
第2節 井澤洋一
- 第3章 七隈古墳群
第1節 1) 塩屋勝利、2) 長野卓司
第2～4節 塩屋勝利
第5節 1～3) 木太久守、4) 田坂美代子
第6節 塩屋勝利、木太久守

5. 本書の編集は、第2章—鳥越古墳群を井澤が、第3章—七隈古墳群を塩屋が各々行ない、合本に際しては井澤が担当した。尚、七隈古墳群の編集は田坂、木太久の協力を得た。

本文目次

第1章 序 説.....	1
1.はじめ.....	1
2.鳥越・七隈古墳群の立地と歴史的環境.....	3
第2章 鳥越古墳E群の調査.....	5
1.調査に至る経過.....	5
2.調査の記録.....	6
1)鳥越古墳E群の立地.....	6
2)第1号墳の調査.....	6
3)第2号墳の調査.....	13
4)その他の遺構及び遺物.....	15
3.まとめ.....	16
第3章 七隈古墳群の調査.....	19
1.第1次調査の経過.....	19
2.第2次調査の経過.....	20
3.調査の記録.....	21
1)七隈古墳群の立地.....	21
2)第5号墳の調査.....	22
3)第6号墳の調査.....	33
4)第8号墳の調査.....	38
4.まとめ.....	45

挿図目次

Fig. 1 七隈古墳群・鳥越古墳E群周辺の遺跡 (縮尺1/25,000)	v
Fig. 2 片江区画整理計画地域及び古墳群 (縮尺1/10,000)	2
Fig. 3 開発計画地域及び発掘調査対象地 (縮尺1/3,000)	7
Fig. 4 表土除去後の地形測量図 (縮尺1/300)	8
Fig. 5 鳥越E群1号墳地山整形の状態 (縮尺1/100)	9

Fig. 6	鳥越E群1号墳石室実測図（縮尺1/40）	10
Fig. 7	1号墳石室腰石の状態（縮尺1/40）	12
Fig. 8	墓道の実測図（縮尺1/60）	13
Fig. 9	鳥越E群2・3号墳地形測量図（縮尺1/400）	14
Fig. 10	出土遺物実測図（縮尺1/3）	15
Fig. 11	七隈古墳群配置図（縮尺1/5,000）	21
Fig. 12	4号墳出土金環実測図（実大）	22
Fig. 13	第5号墳地形実測図（縮尺1/300）	23
Fig. 14	第5号墳出土須恵器実測図I（縮尺1/3）	24
Fig. 15	第5号墳出土須恵器実測図II（縮尺1/3）	25
Fig. 16	第5号墳出土須恵器実測図III（縮尺1/3）	27
Fig. 17	第5号墳出土須恵器実測図IV（縮尺1/3）	28
Fig. 18	第5号墳出土鉄製品実測図（縮尺1/2）	31
Fig. 19	第5号墳出土玉類実測図（実大）	32
Fig. 20	第6号墳地形実測図（縮尺1/300）	34
Fig. 21	第6号墳石室実測図（縮尺1/60）	35
Fig. 22	第6号墳出土土器実測図（縮尺1/3）	36
Fig. 23	玉類実測図（実大）	37
Fig. 24	第8号墳地形実測図（縮尺1/100）	38
Fig. 25	第8号墳石室実測図（縮尺1/60）	39
Fig. 26	填丘土層図（縮尺1/30）	41
Fig. 27	第8号墳出土土器実測図（縮尺1/3）	42
Fig. 28	第8号墳出土鉄製品、玉類、石器実測図（縮尺1/2）	43

表 目 次

Tab. 1	第5号墳出土須恵器法量表	29・30
Tab. 2	第5号墳出土玉類計測表	32
Tab. 3	第8号墳出土玉類計測表	44

図版目次

- P L . 1 (1)鳥越古墳群遠景
(2)笠尾山調査区全景
- P L . 2 (1)鳥越古墳E群1号墳地山整形の状態
(2)1号墳石室検出状態
- P L . 3 (1)1号墳石室閉塞状態（石室内から）
(2)1号墳石室閉塞状態（墓道側から）
(3)1号墳石室及び敷石の状態
(4)1号墳石室腰石の状態
- P L . 4 (1)1号墳石室奥壁の状態
(2)1号墳石室北側壁の状態
(3)1号墳石室南側壁の状態
(4)1号墳石室奥壁腰石の状態
(5)1号墳石室北側壁腰石の状態
(6)1号墳石室南側壁腰石の状態
- P L . 5 (1)鳥越古墳E群2号墳
(2)鳥越古墳E群2号墳地山整形の状態
- P L . 6 (1)笠尾山花崗岩の礫群（樹跡をもつ）
(2)出土遺物
- P L . 7 (1)第5号墳遠景（東より）
(2)第5号墳近景
- P L . 8 (1)トレンチ発掘状態（西側）
(2)トレンチ発掘状態（東側）
- P L . 9 (1)第2群および第3群須恵器出土状態（西より）
(2)第2群および第3群須恵器出土状態（南より）
- P L . 10 (1)第1群須恵器 (2)第2群須恵器 (3)第3群須恵器
- P L . 11 (1)第5号墳より第6号墳を望む。 (2)第6号墳遠景（西南より）
- P L . 12 (1)第6号墳より第7号墳を望む (2)第6号墳発掘作業風景
- P L . 13 (1)玄室より墓道部を望む (2)墓道部および須恵器出土状態
- P L . 14 (1)墓道部および墓道完掘状態（北より） (2)石室完掘状態（西より）
- P L . 15 (1)第8号墳遠景（南より） (2)第8号墳発掘前の状態
- P L . 16 (1)第8号墳発掘作業風景 (2)第8号墳石室裏込め状態および振りかた
- P L . 17 (1)第8号墳玄室遺物出土状態 (2)第8号墳墓道部遺物出土状態
- P L . 18 (1)第8号墳石室完掘状態 (2)第8号墳墓道部の状態
- P L . 19 第5号墳出土須恵器(1)
- P L . 20 第5号墳出土須恵器(2)
- P L . 21 第5・6号墳出土須恵器
- P L . 22 第4・5・6号墳出土土器、金環、玉類、鉄製品



- | | | | |
|---------------|------------|------------|-----------|
| 1. 京の墳古墳 | 7. 五ヶ村池遺跡 | 13. 早苗田古墳群 | 19. 笹原遺跡 |
| 2. 神松寺古墳 | 8. 七隈古墳群 | 14. 鳥越古墳群 | 20. 井手古墳群 |
| 3. 淨泉寺遺跡 | 9. 霧ヶ瀬古墳群 | 15. 潮戸口古墳群 | 21. 梅林古墳群 |
| 4. カルメル修道院内遺跡 | 10. 駄ヶ原古墳群 | 16. 小谷遺跡 | |
| 5. 片江辻遺跡 | 11. 大谷古墳群 | 17. 宝台遺跡 | |
| 6. 片江西遺跡 | 12. 倉浦戸古墳群 | 18. 丸尾台遺跡 | |

Fig. 1 七隈古墳群・鳥越古墳群周辺の遺跡（縮尺1/25,000）

第1章 序 説

1. はじめに

福岡大学の校舎、及びグランド等の関連施設が所在する大字梅林及び片江地区は、律令時代の行政区画では能解郷、及び吐伊郷に比定される地域である。この早良平野東縁部の歴史は旧石器時代に始まるが、古墳時代には油山の東・西の山麓部に大規模な群集墳が形成される。又、中世には油山が密教の靈山としても栄えており、この地域が周辺地域へ及ぼした歴史的影響は計り知れないものがある。

昭和31年に福岡大学が開校されて以来、大学関連施設等の開発のみならず周辺の住宅化は著しいものがあり、油山周辺の丘陵地帯は次々に住宅地城に変貌している。特に昭和48年度に始まった片江地区の区画整理事業は住宅地化に一層の拍車をかけるものであった。区画整理事業地区内の遺跡については第1～3次の発掘調査によって記録保存が計られており^(注1-3)、又、油山一帯の宅地開発による発掘調査についても既報告があるので参考にされたい。

学校法人福岡大学関係の発掘調査では、昭和44年、及び昭和45年に校舎並びにグランド造成工事に伴って七隈古墳群が発掘調査されており、昭和55年には馬術練習場建設に伴い鳥越古墳E群1号墳が発掘調査されている。

今回の報告書では、これらの調査記録を一括して収録するが、七隈古墳群と鳥越古墳E群の発掘調査は調査時期に10年以上の開きがあるため調査の方法、技術に多少違和感を覚えるのは否めない。しかし、これは文化財保護行政における文化財保護のための開発チェック体制、調査組織、調査方法の組織的な改善によるもので、文化財保護の在り方や技術淘汰の歴史的経過として受けとめていただきたい。

発掘調査の関係者については各々、「第II章 鳥越古墳E群」、並びに「第III章 七隈古墳群」の中に記している。各古墳群の地番、及び調査期間については以下のとおりである。

鳥越古墳E群（1号墳）	発掘調査期間	昭和55年11月26日～12月26日
	所 在 地	福岡市城南区大字片江徒尾山108番2～3
七隈古墳群（5・6・8号墳）	発掘調査期間	第1次調査（5・6号墳）
		昭和44年6月23日～7月5日
		第2次調査（8号墳）
		昭和45年8月29日～9月5日
	所 在 地	福岡市城南区大字梅林字弓掛・字烏帽子型



Fig. 2 片江区画整理計画地域及び古墳群 (縮尺1/10,000)

2. 鳥越・七隈古墳群の立地と歴史的環境

七隈古墳群、及び鳥越古墳E群は福岡市の西南部、油山の北・北東側山麓に位置している。これらの古墳群が所在する片江・梅林地区の樋井川流域一帯は、律令時代の早良郡毗伊郷、及び野斛郷に相当している。標高592mを測る油山は、博多湾へ向って延びる標高20~100mの丘陵を多く派生しており、特に標高100mを測る鴻ノ巣山を中心とした小笠・平尾周辺の台地は福岡平野と早良平野に二分している。

狹長な丘陵を形成しているこれらの台地の内、千隈・飯倉丘陵では千隈古墳や青銅利器を出土した飯倉遺跡などが存在するよう、油山から派生する丘陵の多くが遺跡の包蔵地でもある。特に油山山麓での古墳群の集中は目を見張るものがある。片江を中心とした樋井川流域は、カルメル修道院内遺跡出土の尖頭器によって旧石器時代に始まることが明らかとなった。縄文時代には五ヶ村池遺跡や箱ヶ池遺跡が存在するが、五ヶ村池遺跡からは前期曾畠式土器や石槍・石匙等が出土している。弥生時代前期には田島オゴモリ遺跡・津泉寺遺跡・カルメル修道院内遺跡などがあるが、このうちカルメル修道院内遺跡の木棺墓から銅鏡が出土しており、首長層の存在をうかがわせる。中期には宝台遺跡の集落や丸尾台遺跡の素環頭刀子を出土した斐棺墓など前代を上まわる遺跡数が知られており、樋井川流域の弥生時代社会の発達過程が看取できる。弥生時代後期の遺跡は少なく、わずかに小笠遺跡の集落跡と墓跡を検出するにとどまっているが、この時期の集落の立地に変化があったことも考えられる。しかし、古墳時代初期の神松寺遺跡や片江辻遺跡など6世紀代の集落が連続と継続しているので、樋井川流域の狭い平野を利用した水田經營による共同体社会が維持されていたことを示している。片江辻遺跡や神松寺遺跡の集落は七隈古墳群・鳥越古墳E群などの油山山麓の古墳群に直接関連をもつ集落と思われる。古墳時代には、毗伊郷の首長層につながる支配的豪族が存在しており、田島の京の隈古墳や神松寺古墳の畿内型古墳が存在する。前者は前方後方墳で4世紀後半に、後者は前方後円墳で6世紀後半に比定されている。律令時代の遺跡は現在知られていないが、いずれ毗伊郷に関連する遺跡の検出があるものと思われる。古代末から中世には全国的に密教が盛んとなるが、背振山系の油山もまた、東に泉福寺、西に天福寺が創建され、各々の僧坊360余を数えたと云われる。京の隈古墳に設けられた経筒は中国製の陶磁器を経筒の蓋として用いていた。

鳥越古墳群は油山山麓に位置し、油山山塊から北東方向へ鋸歯状に突き出した標高40~100mを測る舌状台地に立地する。鳥越古墳群はA~Gの7群で構成され、各群はA群1基、B群3基、C群4基、D群13基、E群3基、F群2基、G群11基から成っている。D群、及びG群は更に数基のグループに将来整理されるものと思われるが、立地的にみて標高70~100mの間に位置し、標高40~70mの間に位置するA~C・E群に比べると群集性、及び密集度は高い。又、G群はA~F群に対して位置的に離れているので、瀬戸口古墳群に間連をもつ古墳群ともいえ

よう。鳥越古墳群については福岡大学による詳細な調査があるので参照されたい。^(註15)

七隈古墳群は油山山塊から北方に舌状にのびた、樋井川とその支流である七隈川に挟まれた洪積台地上に立地し、油山西北麓の福岡大学構内福岡市西区大字梅林字弓掛、及び字鳥帽子型に所在する。西方に早良平野を控え付近には大小の湖沼を配する風光明媚な地点であり、標高は30~40mの等高線の内に含まれる。七隈古墳群は8基で構成されており、今回の調査では5・6・8号墳を発掘したが、他の古墳については全て未調査のまま消滅している。

鳥越古墳E群、及び七隈古墳群は各々油山西北麓一帯に分布する西油山古墳群の一支群にすぎない。七隈古墳群の調査以後、開発の急速な進展に伴う緊急発掘調査が続いている。この地域に分布する古墳群の実態が次第に明らかにされつつある。七隈古墳群の南方山麓部から東南方の山麓部には倉瀬戸古墳群・大谷古墳群・駄ヶ原古墳群・早苗田古墳群・鳥越古墳群が連続して分布し、この内、倉瀬戸古墳群9基、大谷古墳群7基、早苗田古墳C群3基、早苗田古墳D群1基、鳥越古墳B群3基が発掘調査され、駄ヶ原古墳群・鳥越古墳群が実測調査されている。^(註16) 油山西側の丘陵や谷間には、影塚古墳群・霧ヶ滝古墳群・山崎古墳群などが分布する。^(註17)

以上のように西油山周辺では後期古墳群が数多く形成されているところであるが、これまでの発掘調査でも指摘されているように古墳群形成の経済的・政治的背景の解明を、個々の古墳群あるいは古墳の構造を明らかにする作業とともに進めて行くべき地域であろう。

註1 福岡市教育委員会『片江古跡』 1977

註2 福岡市教育委員会『早苗田D群10号墳』 1981 昭和55年3月21日~5月19日に発掘調査

註3 福岡市教育委員会『片江古跡』 1973

昭和47年度発掘調査。ここでは早苗田C群の3基と鳥越B群の3基が発掘調査されている。

註4 日本住宅公団「カルメル修道院内遺跡」『京の限遺跡』所収 1977

註5 "『宋台遺跡』 1970

註6 "『宝台遺跡』所収 1970

註7 "『小菴遺跡』第1次調査 1973

註8 "『小菴遺跡』第2次調査 1975

註9 東洋閣発株式会社『淨泉寺遺跡』 1974

註10 福岡市教育委員会『淨泉寺遺跡』第2次発掘調査 1983

註11 段谷地所開発株式会社『京の限遺跡』 1977

註12 " " "『神松寺遺跡』 1978

註13 片江区画整理事業地内第1次調査で報告された「片江6・7・8号墳」は鳥越B群をさしている。

註14 昭和52年度に福岡市教育委員会が発掘調査を実施した。報告書は未刊。

註15 福岡大学歴史研究部「七隈」第19号 1981 (昭和56年)

註16 倉瀬戸古墳群調査団「倉瀬戸古墳群」 1973 昭和46年12月発掘調査

註17 福岡市教育委員会「大谷古墳群I」 1972 昭和47年2月~3月(第1次調査)7~8月(第2次調査)に発掘調査、報告書は第2次調査の成果報告である。

註18 福岡大学歴史研究部「駄ヶ原古墳群・霧ヶ滝古墳群分布調査概報」 1976

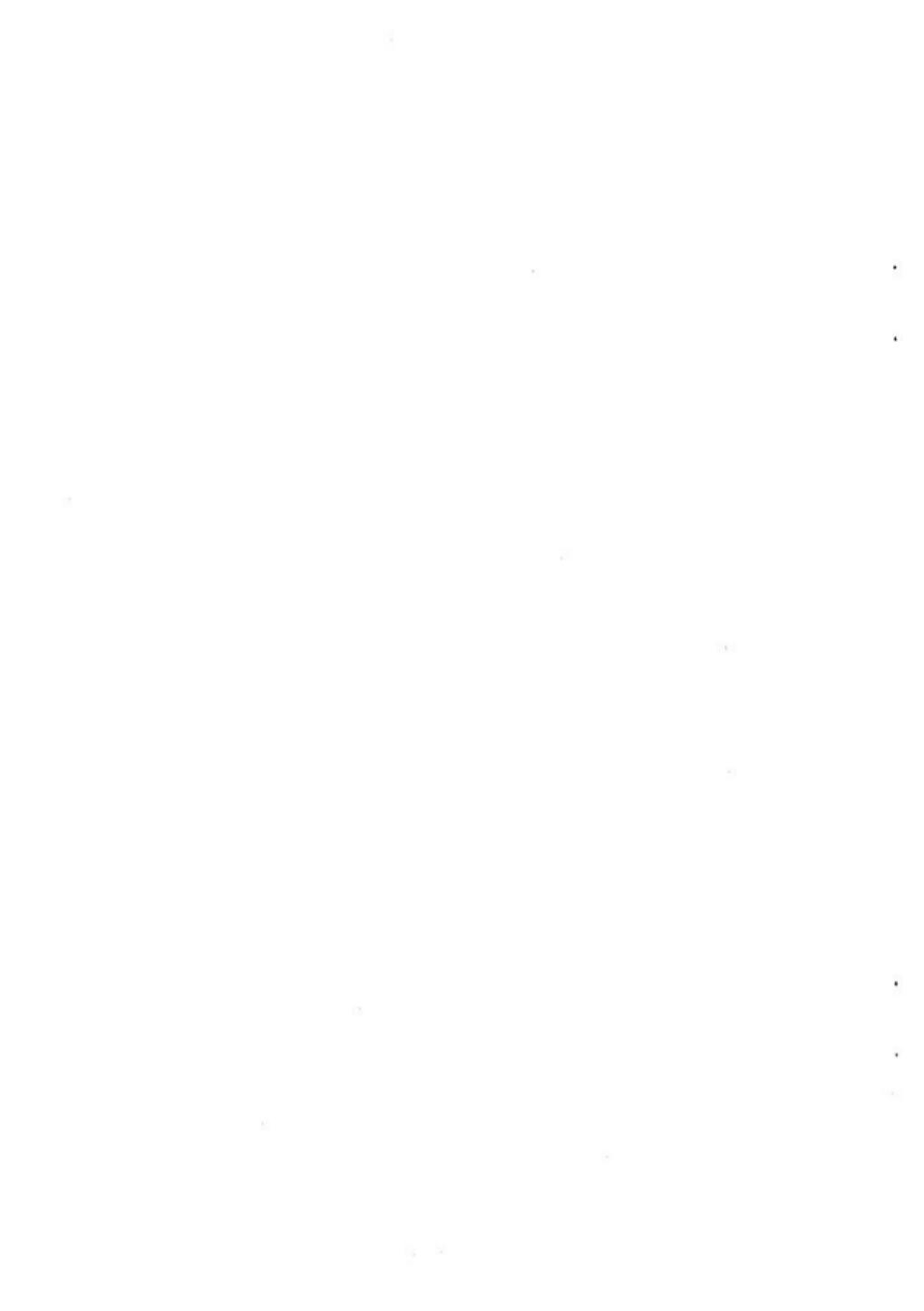
註19 福岡市教育委員会「影塚1号墳発掘調査報告書」 1972 昭和46年10月~11月発掘調査

註20 福岡市教育委員会『福岡市文化財分布地図(西部1)』 1979

註21 昭和49年7月~8月 発掘調査が実施された。報告書未刊

鳥越古墳 E 群

福岡市城南区(旧西区)大字片江字篠尾山108-2・108-3
に所在する古墳群の調査



第2章 烏越古墳E群の調査

1. 調査に至る経過

烏越古墳の発掘調査は、福岡大学の馬術練習場、及び厩舎建設に伴って実施されたものである。この地域は從来より西油山古墳群として周知されており、標高30~100mの高さを測る丘陵上の各所に古墳群が存在している。昭和47年に工事着手された片江区画整理事業地域は神松寺から油山山麓までの南北方向の長さ約2.56km、七隈から堤にいたる東西方向の長さ0.3~1.0kmを測る広大、且つ狹長な範囲である。この事業地域内には当然、油山山麓に立地する古墳群も含まれており、昭和47年度に烏越古墳B群の3基と早苗田古墳C群の3基が発掘調査され、昭和55年度には早苗田古墳D群10号墳が発掘調査されている。^(注1) 烏越古墳E群を含む地域は油山^(注2) 山麓の山腰に抱かれ、区画整理事業地域内には含まれない。昭和55年に申請された福岡大学の馬術練習場及び厩舎建設設計画は約18,600m²に及ぶ広大な面積であり、烏越古墳E群をかろうじてかすめているものの当該設計画地に古墳群の存在する可能性は充分あった。昭和55年7月に現地踏査を行ない、古墳と考えられる盗掘穿のある小丘を発見したため工事に先立って発掘調査を実施した。発掘調査の範囲は丘陵緩傾斜面の約1,563 m²を対象として行ない、昭和55年11月26日~12月26日迄実施した。発掘調査の組織と構成は以下のとおりである。

調査委託者 学校法人福岡大学（理事長 瓦林 潔）

調査主体 福岡市教育委員会

調査担当 福岡市教委文化課埋蔵文化財係

文化課課長 井上 剛紀

埋蔵文化財第2係長 柳田 純孝

事務担当 古藤 国生

技術担当 井澤 洋一

調査補助員 児玉健一郎

調査協力者 岩城庄助、松尾和雄、高浜謙一、山根義輝、西原俊一、野村美砂恵、坂口フミ子、佐藤テル子、金子由理子、清原ユリ子、西尾たつよ、真子昌子、井上照代、渡辺武子、松井フユ子、松尾圭子、和田八重子、西原春子、山田文子、藤森良子、浅田貞子、真鍋町代

整理作業 山中香路里、花田早苗、原 秋代、池田洋子、深堀博子

2. 調査の記録

鳥越古墳E群は油山山麓の標高40～65mを測る舌状台地部の東側傾斜地に位置している。昭和53年度の分布地図（西部I）では古墳群は1～3号墳の3基で構成されており、標高50～55mに在る。この3基は地図上では今回の開発計画地域には入っていないため調査対象ではないが、発掘調査時に再度の分布調査を行なった結果、1号墳を確認できなかった。分布調査時点での古墳群の詳細が不明であるが、1号墳そのものが存在しない場合が考えられる。調査区内で検出した小石室墳を分布地図に従い4号墳とすることも考えたが、分布地図の位置関係から小石室墳を1号墳に置き換えた方が妥当と思われる。よって、今回の調査で検出した小石室墳を1号墳と呼称する。

1) 鳥越古墳E群の立地

本群は北東に伸びる油山山麓の標高48～58mを測る鋸歯状台地の東緩斜面に立地する。標高56～58mの間に位置する1号墳の東側に近接して2号墳、3号墳が立地している。本群が立地する丘陵は、花崗岩の風化土と頁岩質の風化土が混合して堆積した土壤である。この風化土には花崗岩の転礫が多く含まれており、いたるところで採石が行なわれた模様で、採石場と呼ぶべき土壤が存在する。そのため盛土をもつた古墳状を呈し、伐採前の状況では間違い易い。又、一部の大形礫石には楔跡をとどめるものもある。

2) 第1号墳の調査

1号墳は上記の転礫群中に所在し、標高56～58mを測る斜面に位置することもあって、地表面上で墳形を確認することはできなかった。

墳丘 (Fig.5、P.L.2)

上述の如く、表土除去後に古墳と確認したもので、盛上の状態を把握できなかった。墳丘の流出を考えても、盛土は然程高くなかったものと考えられる。石室玄室の高さは約70cmを測るが、玄室の奥壁は腰石の上部に1段の小口積みを行なっている。この高さは南側壁高より約10cm低い。天井石の架構を考えた場合、玄石腰石上部に少なくとも2段の積石があったと思われる。石室床面からの地山整形高が60cmを測るので、各壁に更に1～2段の小口積み、及び天井石の架構があったと考えると、少なくとも50cmを越えるものと思われる。

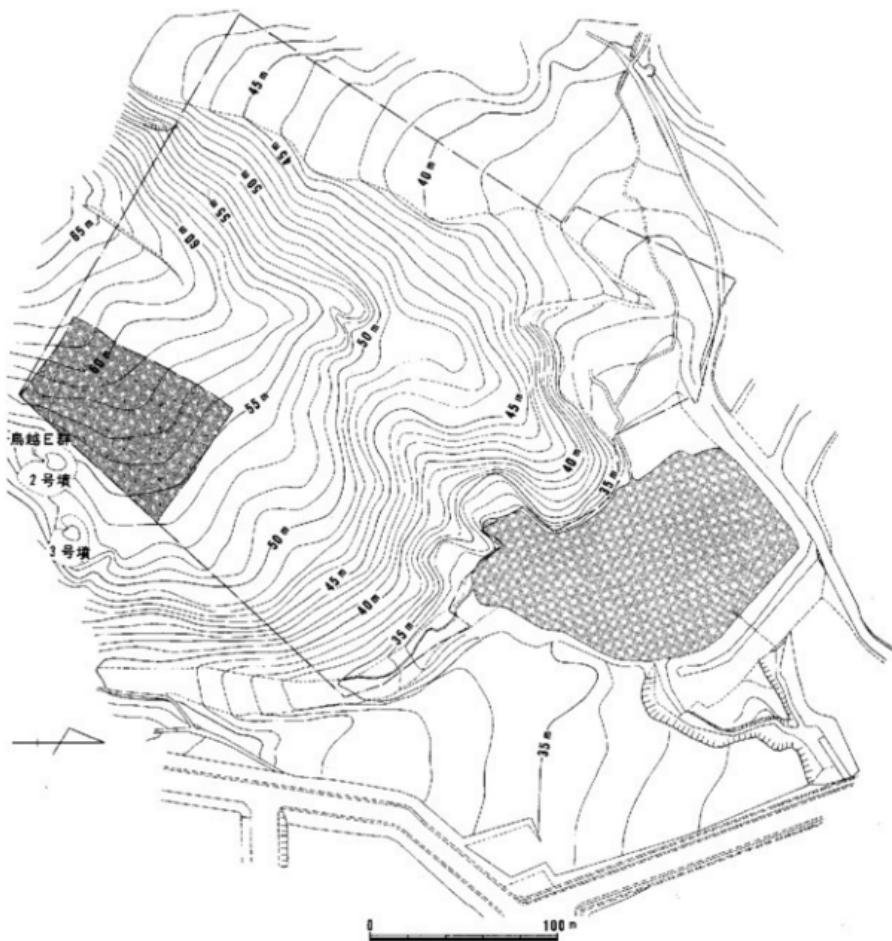


Fig. 3 開発計画地域及び発掘調査対象地 (縮尺1/3,000)
地山整形及び石室掘り方 (Fig. 5・6、P.L.3)

--- 事業地域
■ 調査区

本墳は標高56～58.50mの緩斜面に位置している。ここで用いる地山は上述の如く、花崗岩風化土、及び第3紀洪積層の頁岩質風化土の堆積層である。地山整形は堆積層を掘り込んで

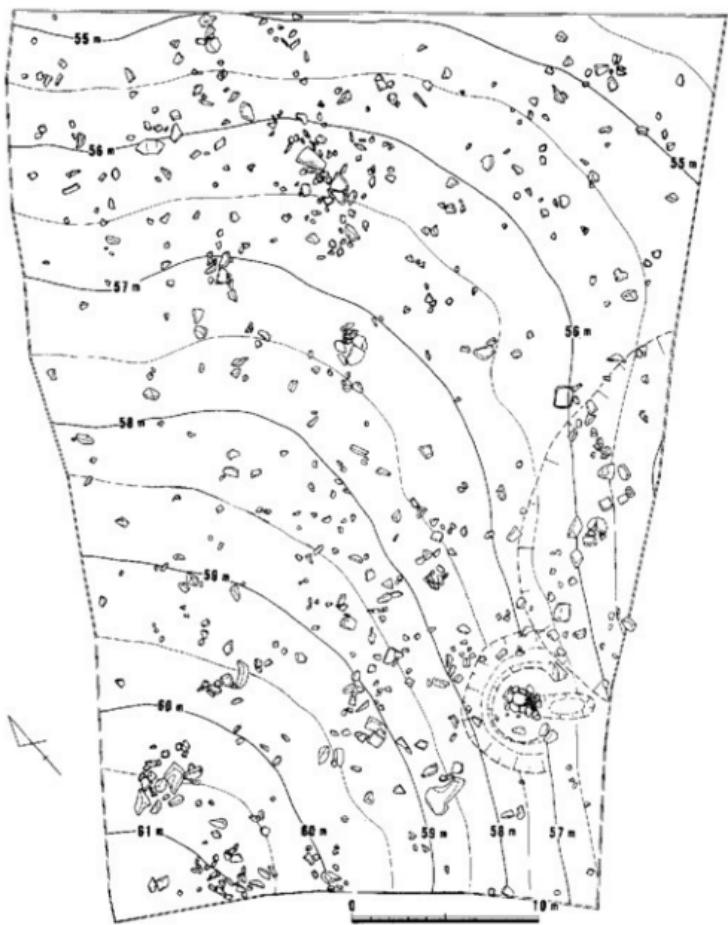


Fig. 4 表土除去後の地形測量図 (縮尺1/300)

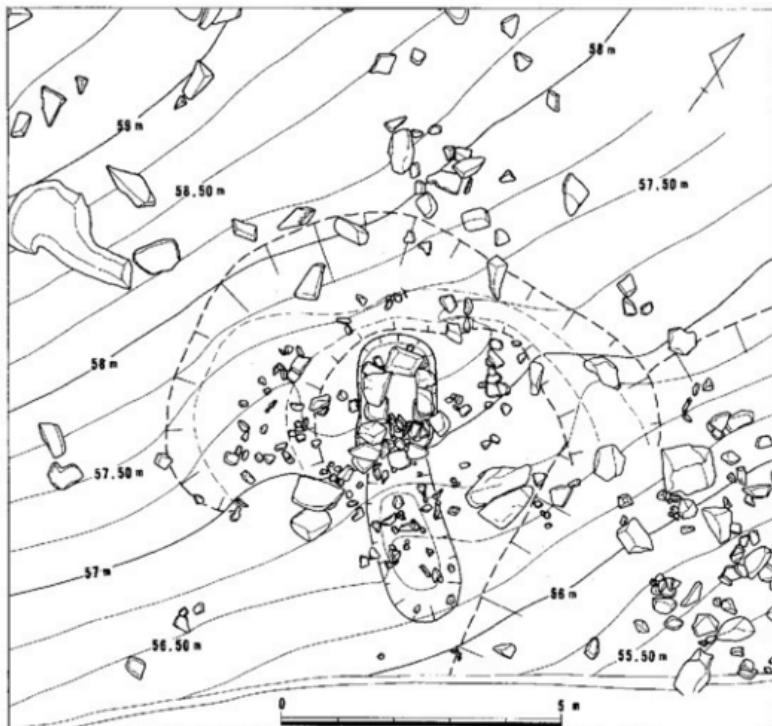


Fig. 5 鳥越 E 群 I 号墳地山整形の状態 (縮尺1/100)

形成されるため明瞭に定形化した形状を把握することが出来ない。すなわち石室背後の斜面を削り込み、石室を開むように馬蹄形の周溝を巡らす。馬蹄形状の周溝は不整半円形と言えるもので、全周しない。幅は1~3mを測り、背後斜面との比高差は最も深いところで74.6cmを測る。墳丘地山整形部分は不定形の周溝状遺構の影響を受けて不整半円形を呈している。地山整形面の東西長5.5m、南北長3.0m、周溝状遺構の底面からの比高差は約30cmを測る。石室はこの地山整形面の中軸から西に片寄って構築される。石室疾道部西壁の先端には八ツ手状に聞く貼り石が認められるが、東壁には存在しない。地山整形の南東側、すなわち石室前面には墓道を狭んで、左右に各々2石からなる大石が据えられている。西側は長さ70cmと85cmの2石、東側は長さ127cmと108cmの2石からなっている。東側の2石は元来1石であったのが分離した状態を示している。疾道部西側の貼り石は2石の据石まで伸びているので、疾道部東側も元来2石の据石まで貼り石が存在していたものと思われる。周溝状遺構の西側先端はこの2石の

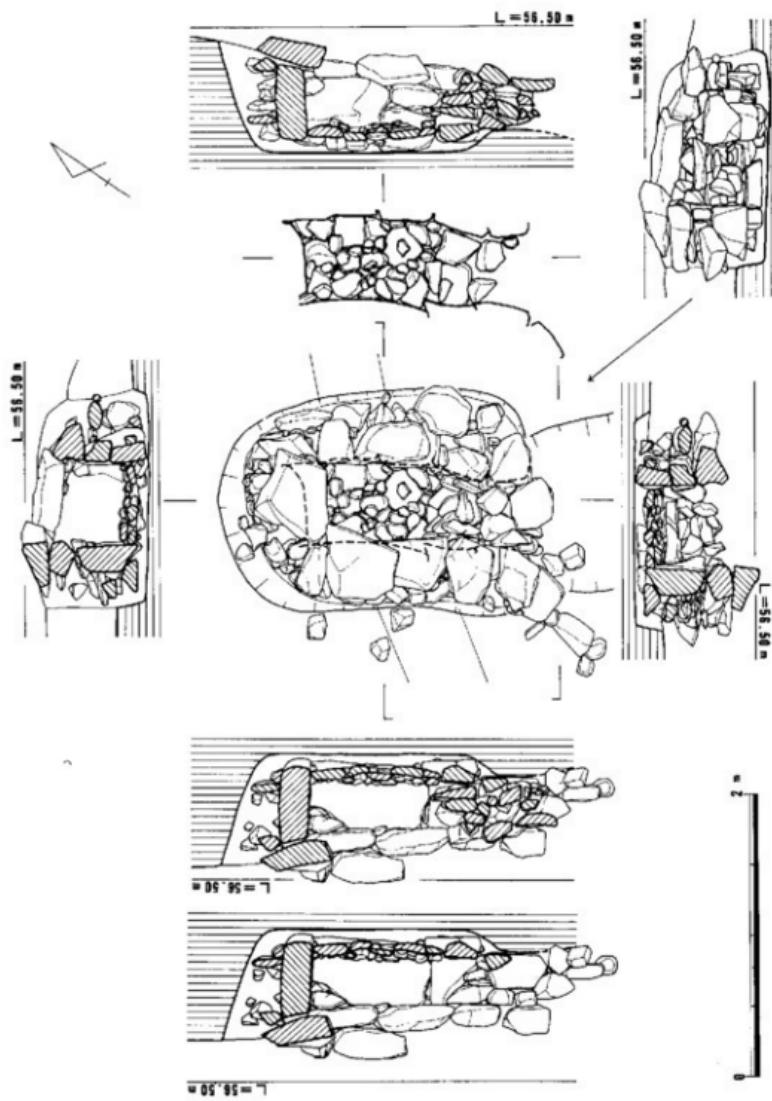


Fig. 6 烏越 E 群 1 号墳石室実測図 (縮尺 1/40)

部分で終っている。

石室の構造 (Fig. 5・6、P.L. 3・4)

本墳の石室は開口主軸方位を S 33°30' E に取り、谷に向かって略南東方向に開口する単室無袖の小型横穴式石室である。石室は玄室、及び羨道部の天井石を全て失ない、側壁の上部を損壊している。石室平面形は長方形の玄室にやや西寄りに聞く羨道が接続するが、玄室と羨道部の境は明瞭ではない。羨道部については玄室に比べ幅がやや狭ばまることや敷石が無いことで判別した。羨道部の長さは閉塞石内側から閉塞石外側端部に相当する範囲で、それより先は貼り石と考えられる。石室現存長は、西壁で 186cm、東壁で 167cm である。貼り石を加えると西壁は 217cm を測る。東壁は羨道部先端と貼り石が損壊しているため側壁全長は西壁に比べ短いため貼り石を加えた長さは出せない。石室の掘り方は明瞭ではないが、長さ 217cm、最大幅 155cm を測り、隅丸長方形状を呈している。尚、石室に使用された石材は全て花崗岩であるが、古墳周辺で容易に集めることができる。

玄室、羨道 (Fig. 5・6、P.L. 3)

各壁体の構築法は共通しており、玄室、及び羨道部の石積み方法による区別は見当らない。玄室の腰石は扁平な大形礫を立てて用いている。玄室奥壁は高さ 68cm、幅 65cm の扁平礫の 1 石を用い、玄室東壁は長さ 80cm、高さ 48cm の大形扁平礫と長さ 40cm、高さ 33cm の小形扁平礫の 2 石を用い、玄室西壁は長さ 99cm、高さ 48cm の大形扁平礫 1 石を用いている。立てられた腰石の内外には 10~40cm の大きさの礫が根詰めや裏込めとして多数用いられている。2 段目以上は長辺の小口を揃えて持ち送り気味に煉瓦積みし、各石の間隙には小礫を詰めている。奥壁の 2 段目は扁平な大形礫を用いるが底状に玄室内に大きく突き出している。

玄室床面は 20~40cm の長さの扁平礫を敷き、その間に 10cm 内外の小礫をつめ込んで敷石としている。奥壁幅 58cm、玄門 60cm、玄室東壁長 87cm、玄室西壁長 97cm、玄室高は最も遺存度の良いところで 75cm を測る。玄室平面形は各號の腰石の用い方で若干歪みがあるが長方形を呈している。

羨道部は閉塞石内側までを羨道部と見做すかどうかで長さが異なってくる。閉塞石内側までを玄室とすれば、羨道部は西壁長 95cm、東壁現存長 66cm を測る。この部分には敷石は無く、腰石は幅 30~44cm、高さ 25~35cm の大きさの塊石を据えている。玄室腰石が扁平礫を立てて用いるのとは構築法を異なる。又、掘り方の床面は玄室に比べ、羨道部部分が約 15cm 高くなっている。幅は玄室に比べ 50~55cm 狹くなっている。壁体の構造は玄室と同じであるが、西壁の 2 段目は玄室腰石の高さに揃えるため幅 15~20cm、高さ 12cm 前後的小礫を重ね、その上部は塊石

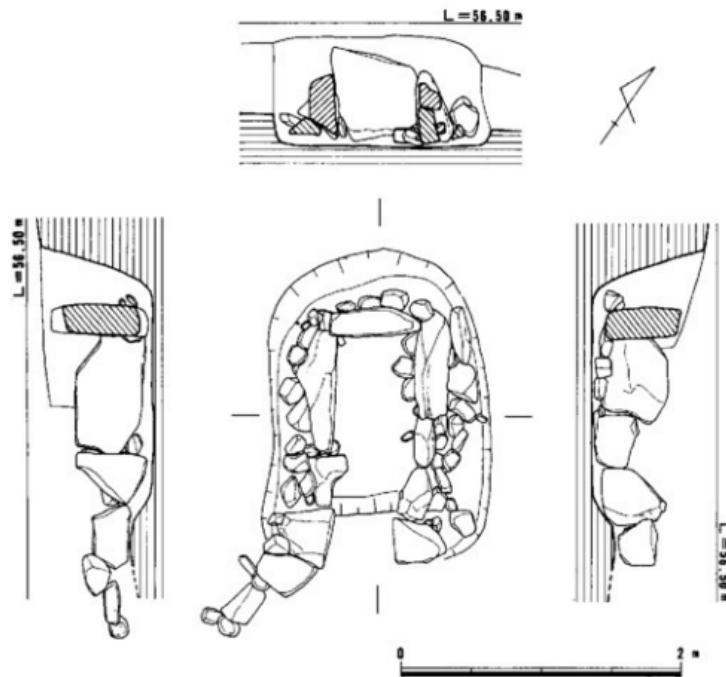


Fig. 7 I号墳石室腰石の状態（縮尺1/40）

の煉瓦積みを行なっている。東壁は2段目以上を欠いているが、腰石の高さが玄室の腰石より低いので西壁同様の構造と思われる。

両壁に袖石は認められないが、西壁の奥より2つ目の腰石が縦位に立てて用いられており、この腰石の上部が内側へ張り出すため袖石状を呈している。又、閉塞石の内側はこれより始まるので、袖石を意識するものと思われる。玄門部分と思われる開口部の床面の敷石には長さ30～35cmの扁平砾を2石用いている。この敷石は東西方向に内側の小口を擴えて並べられており、この上部には閉塞石が平積みされていた。この2石は丁度、玄室振り方の段落ち部分（玄門部分）に位置しているので橋石の要素をもつものと思われる。狭道部床面には敷石がない。床面は玄室床面や橋石と思われる2石よりも2～3cm低くなる。狭道の開口部からは約30°の角度の急激な段差があって、基道に接続している。

閉塞施設 (Fig. 6、P L. 3)

狭道部の閉塞は奥壁から86～170cmの間に施される。玄室敷石端を根石にして長さ86cm、高

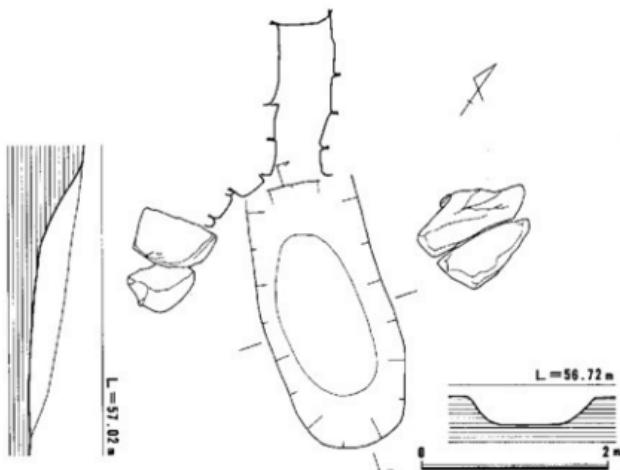


Fig. 8 墓道の実測図（縮尺1/60）

さ48cmを測る。石積みには挙大から人頭大の転石を用いるが、長さ20cm前後の扁平な礫が多用される。それらは長軸方向をそろえており、特に玄室側は扁平な礫を丁寧に平積みしている。

墓道 (Fig. 8, P.L. 2)

石室は南東方向に横口を開口している。羨道部の先端より急激に傾斜して浅い土壌状の墓道を形成する。墓道の断面形は逆梯形を呈し、墓道の幅は1.2~1.4m、長さは約3.0mを測る。墓道最下部と、羨道部底面との比高差は約60cmを測る。覆土は黒灰色、又は黒褐色の枯質土で、締りがなかった。遺物等の出土は無い。東へ若干伸びるものと思われるが、調査区の境界地であることや急傾斜の地形に変換するため確認できなかった。

出土遺物

石室内、及び古墳周辺からは1片の土器又は古墳にかかわる遺物は出土していない。

3) 第2号墳の調査 (Fig. 9, PL. 5)

本墳は標高50~56mを測る丘陵斜面に立地している。本墳の西に1号墳が、東に3号墳が接している。東西15.2m、南北16mの橢円形を呈した円墳である。墳丘頂部は平坦で、東側からの

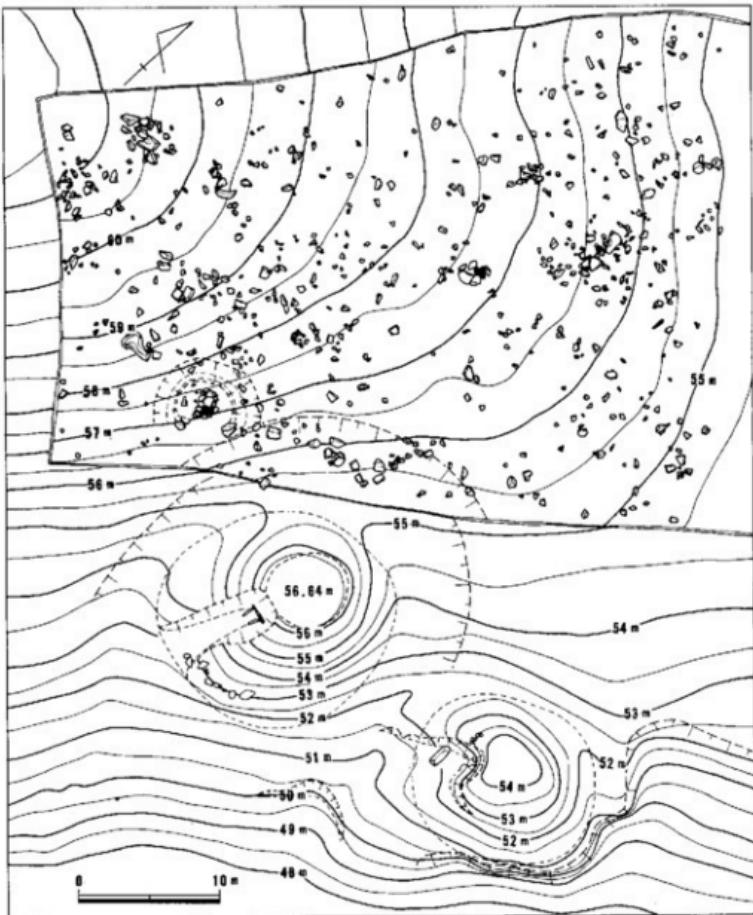


Fig. 9 鳥越E群2・3号墳地形測量図(縮尺1/400)

見かけ高4.94mを測る。内部主体は主軸を S 22°Wに取り、略南に開口する両袖複式の横穴式石室である。

墳丘自体は、開発地域の対象になっていないが、今回の調査では墳丘西側裾部、及び墳丘西側斜面の地山整形部分を発掘調査した。その結果、地山整形は標高55~57m迄の落差の大きな整形を行なっているので、この地山整形は2号墳の西側後背斜面に最大幅約3mを測る周溝状を呈していたものと思われる。^(註1) 2・3号墳は今回の調査対象ではないので詳細を述べることはできないが、これらの古墳については福岡大学歴史研究部の分布調査報告があるので参考にしていただきたい。

4) その他の遺構及び遺物 (Fig.10, PL. 6)

転礫には幾つかのまとまりがあるので、油山の性格上、祭祀遺構等の存在も考えたが、多くの場合、採石による残滓石と考えた方が良いようである。それ以外には、土壙が1ヶ所認められた。

土壙 (Fig. 4) は長さ120cm、幅約100cm、深さ約20cmを測る。周壁は焼けており、内部は炭化物が多量につまっていた。遺物の出土はない。

遺物は幾つかの転礫群から土師皿の細片が出上しているが、器形を復元するには至らない。又、祭祀的な土壙等の存在を考えたが検出できなかった。その他、環状石器がやはり転礫群中より出土している。

環状石器 (Fig.10, PL. 6)

約1/2の破片である。推定外径9.6cm、孔径3.0cm、厚さ3.3cmを測る。断面形は不整の菱形を呈し、外縁は丸味をもち、かるい稜がついている。内縁には約93°の角度をもった稜がある。表面が風化しているため研磨については不明である。灰青色を呈しており、玄武岩と考えられる。

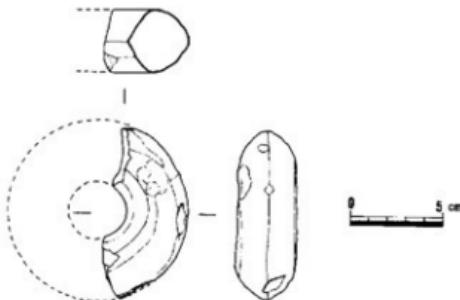


Fig. 10 出土遺物実測図 (縮尺1/3)

3. まとめ

上記で述べた通り、調査では古墳1基および土壙1基を検出した。古墳は横穴式石室の小石室を主体とするものである。同一群を形成する2号墳は複室の横穴式石室、3号墳は両袖单室の横穴式石室を主体部としており、壁体の石積み方法や構造からほぼ6世紀後半～末の時代に位置づけられる。1号墳は2号墳と埴丘を接しており、墓道は2号墳の周溝内へ接続していることから2号墳との強い従属関係をもっているものと思われる。よって1号墳の年代は6世紀末から7世紀初頭の築造を考えるのが妥当である。

福岡市内に於ける小石室の例は7遺跡8例ある。西から相原4号墳、徳永アラタ7号墳、熊添4号墳、駄ヶ原C-5号墳、鳥越E-1号墳、大谷3号墳、柏原C-3・6号墳である。横穴式石室の小形化したものは相原4号墳、駄ヶ原C-5号墳、鳥越E-1号墳、柏原C-3・6号墳で、相原4号墳は長方形の玄室に、片袖の石室、駄ヶ原C-5号墳は横長の玄室に両袖を有した石室、柏原C-3号墳と鳥越E-1号墳は長方形の玄室に、無袖の石室である。駄ヶ原C-5号墳の石室構造は、那珂川町の中原III群3号墳の石室と構造上の系譜をもつが、壁体構築が粗雑であり、より矮小化した石室構造と言える。柏原C-6号墳は、ほぼ方形を呈した玄室に形ばかりの玄門を設け、玄門と同じ内法の羨道が付設しているが、こうした構造も又、中原III群29号墳に構造上の系譜をたどることができる。熊添4号墳、徳永アラタ7号墳は床面の平面形が長方形で、両側壁に2～3石を用いた石棺状の石室構造を呈している。側壁上面を揃えるため腰石上に1～2段の塊石積みを行ったものと思われる。いずれも両側の小口石は1枚石で、外側からたてかけた状態を呈し、横口を意識している。熊添4号墳の横口部の石材は他と異なり安山岩系の板石を用いている。大谷3号墳は竪穴式小石室と報告されるものだが、腰石の配置、壁体の構成は横穴式石室の手法をとったものである。上記の小石室はいずれも時期比定の遺物が少ないものの、従属する古墳群との密接な関係を保っているため、築造年代については充分推測し得る。相原4号墳は同3号墳に近接した年代、すなわち6世紀後半～末を比定され、徳永アラタ7号墳は古墳群（6世紀中頃～末）の最終段階を考えて7世紀初頭を考えられている。鳥越E-1号墳は群構成から、やはり6世紀末～7世紀初頭が考えられる。大谷3号墳は単独墳であるが、周溝内の遺物から6世紀中頃に比定され、熊添4号墳は石室内出土の須恵器がIV期を示していた。駄ヶ原C-5号墳からはVI期の須恵器が出土しており、最も新しい時期の小石室である。これらの小石室は後期～終末期の古墳群に伴い、6世紀中頃から7世紀後半まで存在し、いずれも規模、構造上から初幕で完結したものと思われる。被葬者については相原4号墳では小児を推定されている

福岡県内での小石室の検出例は増加しているが、これらが多くが後期～終末期古墳群の中に見出される。しかし、特に後期～終末期に至っては石室規模の小型化や石室構造の矮少化が目立っており、法量上だけでは小型石室との区別はなさない状況にあるために、こうした小石室に対する概念規定はあいまいで、調査担当者によってはまちまちの呼称が行なわれている。例えば、石棺系竪穴式小石室、小型(小)竪穴式石室、小型石棺状石室、石棺系小竪穴、横穴式小石室、小形無袖横穴石室、小形石室、石棺墓等々がある。いずれも視覚的見地に立っており、築造時期、構造等を明確に表わすものではない。これらの小石室について上野精志氏は沙井掛古墳、向山古墳群の調査の中で「両袖式で小型の単室である横穴式石室が退化したもの」としてとらえ、「小横穴式石室」は「横穴式石室が小形化したもの」、「横穴式小石室」は「小形の横穴式石室であるが竪穴式石室の性格を有している。玄門部をみると高さ、幅とも非常に小さく又、墓道についても形成的に付属している程度」の為横口からの埋葬が疑問に思われる構造を示すもの、「横穴式系小石室」は「横穴式小石室の羨門がなくなり、竪穴式石室的な小石室であり、これには超小型の石室もある」と規定され、これらを含めて、a類一小横穴式石室、b類一横穴式小石室、c類一横穴式石室系小石室に分類された。この中では山中英彦氏が「石棺系石室」の中に含まれた津古内烟遺跡、八隈9号墳、観音山中原田群-16、30号墳について、
「終末期の石棺を、あくまで構築方法が横穴式石室の特長を備え共通し、退化形態であることからc類に含まれるものと明示されている。上野氏のa類、b類は、石室構造上いくつかの系譜が認められるところから、地域性や群構成内の石室構造などの系譜にも注意する必要がある。例えば都地E-2号墳は竪穴式石室状の石室に横口を設けた構造で6世紀中頃に比定されるが、同一地城には沙井掛30号、高平2号墳にその終末の系譜を認められる。又、辻田古墳群の中で、児玉氏は、小竪穴式石室について石棺系石室をも含めて5世紀代に限定できるものとし、「6世紀後半頃から出現し、横穴式石室を持つ群集墳の周辺で発見される石棺系の短側壁の小石室ではなく、幾内型竪穴式石室のものや、箱式石棺系の小竪穴石室で、成人1体の伸展葬が可能な長辺の石室を言う」と規定し、後期～終末期に認められる上野氏のc類とは区別されている。しかし、柿原古墳群では石棺系竪穴式石室のH-C-4号墳が「5世紀代に比定されるG・C-1号墳と同一構造、規模ながらも、7世紀中葉～後葉の円墳の周溝が埋没した後に築造されたもの」として、8世紀中頃まで下ると推定されている。このH地区には長さ約87cmの、やはり石棺系の小石室H-C-1号墳が伴っており、地域的には石棺系竪穴式石室の系譜を終末までたどれることを示している。竪穴構造を持つ小石室のうち、城ヶ谷G号墳は横穴式石室の構築法を有し、6世紀前半に比定されている。又、浦谷1～4号小石室は竪穴系横口式石室に伴っているが、1・2号小石室が6世紀初頭～前半、3・4号小石室が5世紀後半～末に近い時期が比定されるが、2号小石室の覆石は石棺系竪穴式石室の系譜を認めることができる。追葬が不可能な小石室—上野氏のb・c類を含めて整理すると以下のようになる。

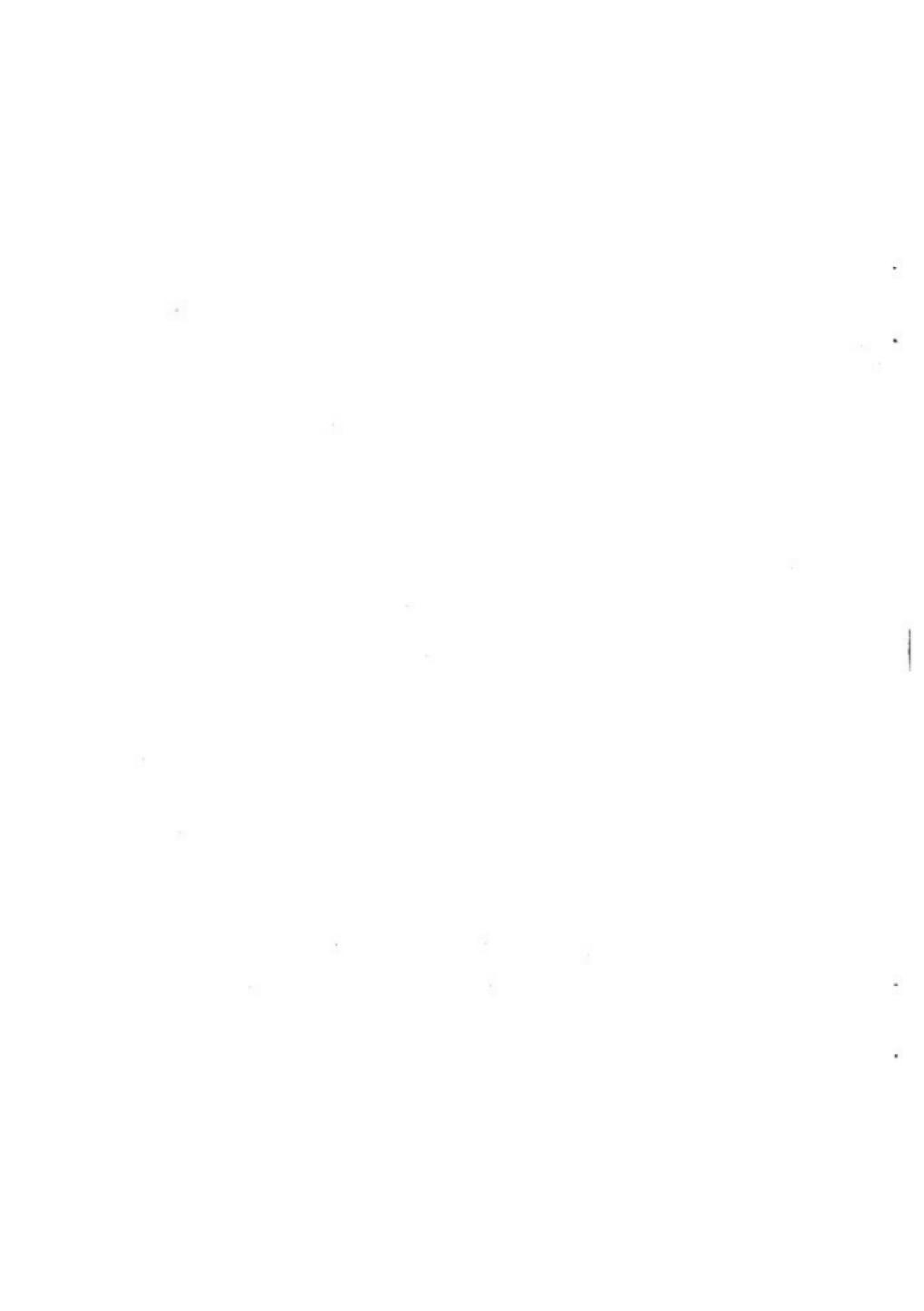
- I. 穴構造をもつ小石室
1. 横穴式石室系統 横穴式構築方法を採用、積石に塊石を用いる。
沙井掛31～41号墳、中原田群16、30号墳
 2. 石棺系竪穴式石室系統 塙石は板石を用い、上部に小口積みを行なう。
柿原日・C-1号墳、浦谷1～4号小石室。
 3. 箱式石棺状石室の系統
 - a. 塙石は長目の自然石を用い、上部は小塊石を積み上げる。津古内細2～5号石室
 - b. 構造は3と同様であるが、一方の小口に横口を意識するもの。熊添4号墳、徳水アラタ7号墳
- II. 横口構造をもつ小石室
1. 両袖单室の横穴式石室の系譜を引くもの
 - a. 長方形・羽子板プランの玄室 両袖…中原33号墳
片袖…相原4号墳
無袖…鳥越1号墳、城ヶ谷3号墳
 - b. 方形・横長プランの玄室 両袖…駄ヶ原C-5号墳、柏原C-6号墳
都地D-2号墳のように竪穴式石室に横口を開けた石室構造の系譜を引くもの。
無袖…沙井掛30号墳、高平2号墳、観音浦30号墳

以上の通り、小石室として報告された石室は多様な石室構造を示しており、I-1類は6世紀後半から8世紀初頭までが考えられる。I-2類の竪穴構造の小石室については5世紀までさかのばるものもある。I-3類については、大谷3号墳が最も古く、他は6世紀後半から7世紀後半代に位置づけられる。II類は横穴式石室の退化形態を示すもので6世紀中頃から7世紀後半までに位置づけられる。現在、県下では約27遺跡84例におよぶ小石室例がある。前期古墳の中でも墳丘裾部に陪葬墓としての土塚墓、石蓋土塚墓、石棺墓が存在するが、上記の小石室も単独で存在することは非常に少なく、陪葬墓の要素は強い。これらは各地域における古墳群の構成や石室構造上の系譜の中で、年代や被葬者について位置づけを考えるべきであろう。又、小石室の分布地域は小都市から筑紫野市にかけてはI類が集中し、I・II類の混在は那珂川町、宗像・鞍手・柏原郡周辺に存在する。後期・終末の古墳群の状況や石室構造上の系譜によっては、一定の地域を限定できるものとして興味をもたれる。

*註の参考文献は46ページに掲載しているので参照されたい。

七隈古墳群

福岡市城南区(旧西区)大字梅林福岡大学構内
所在の後期古墳群の調査(1969・1970)



第3章 七隈古墳群の調査

1. 第1次調査の経過

本古墳群発掘調査の契機は、福岡大学の馬場および自動車練習場造成工事によるもので、昭和44年6月、福岡大学歴史研究同好会の学生諸君によって造成工事のため古墳が破壊されつつあることが発見された。同研究会は福岡大学当局に対し、ただちに文化財保護法に基く適切な処置を取るように申し入れ、これにより福岡市教育委員会と福岡大学との間で協議が行なわれることになった。

福岡市教育委員会は、現地踏査の結果記録保存の方針を決め、福岡大学当局と発掘調査について具体的な協議を行ない、昭和44年6月23日～7月5日までの2週間にわたって発掘調査を実施することになった。調査の組織と構成は次のとおりである。

調査委託者 福岡大学

調査主体 福岡市教育委員会

調査担当 福岡市教育委員会指導部文化課文化財係

事務担当 青木 崇、清水義彦、石橋 博

技術担当 三島 格、下條信行、柳田純孝、折尾 学、塩屋勝利

調査協力者 福岡大学歴史研究同好会

福岡大学施設課、肥山正秀、相戸 太

特に福岡大学歴史研究同好会の学生諸君には、講義の合間とはいえ、調査全期間を通して梅雨期の悪天候の中で貴重な労力を提供していただいた。また、福岡大学施設課からは調査に必要な機材および倉庫などを提供していただくとともに種々の便宜をいただいた。記して謝意を表したい。

福岡大学歴史研究同好会の調査によれば、造成工事以前において工事予定地内には計6基の古墳が存在していたことが確認されている。しかしながら遺跡発見の報により福岡市教育委員会が現地踏査を行なった際には、第1号墳～第4号墳までの4基の古墳はすでにブルドーザーによる破壊を受けて壊滅しており、残念ながら調査に耐えうるような状態にはなかった。したがって実際に発掘調査を実施した古墳は、第5号墳と第6号墳の2基のみである。

発掘調査は、昭和44年6月23日より着手し、まず第5号墳より開始した。樹木の伐採、地形測量、トレンチ掘削を経て6号墳の調査を並行して行ない、7月5日に調査を終了した。ちょ

うど梅雨期であった為、降雨に妨げられて発掘作業は困難をきわめた。

本調査は発掘調査費の制約によって調査期間がわずか2週間であったこと、遺跡の発掘調査技術と学問的發展段階の限界性などにより、部分的な発掘調査にとどまった。また、古墳群を形成する第1号墳～第4号墳が未調査のまま破壊されたことは、文化財保護の点からも学問的な見地からも誠に遺憾なことである。

2. 第2次調査の経過

昭和45年5月、福岡大学学生相戸太君により、校内南端部グランド拡張造成地に半壟状態で露出した古墳1基が発見された。第6号墳の南方150mに位置し、本古墳群中に新たに発見されたものである。発見の通報を受けた福岡大学歴史研究同好会は、ただちに福岡市教育委員会に報告し、三島主事、田坂技師と現場を実見した。残存部の崩壊は著しく、現状維持、保存は困難であることから、発掘調査の必要性を重視し、福岡大学当局、上記同好会、福岡市教育委員会との協議検討を行なった。その結果、福岡市教育委員会の指導のもとに福岡大学歴史研究同好会が発掘調査の主体となり、同年8月29日から9月5日までの1週間、調査を実施するところとなつた。調査関係者は次のとおりである。

調査委託 福岡大学 曾財課 学生課

調査主体 福岡大学歴史研究同好会

考古学班 馬場高行、長野卓司（3年）磯部昭憲、金光俊二、永浜敏裕、大村ゆみ子、高崎恵子、原 和恵（2年）佐藤保雄、木太久守、桑田和義、大蔵進馬渡広幸、安恒妙子、矢野良子、高村昌治（1年）

日本史班 中西孝治、川島博明（3年）日下鉢子、福田けさちよ（2年）森永裕、嘉賀雄也、末次圭亮、広瀬茂太、龍門 悟、田中久美子、山崎悦子、前田依子（1年）

調査指導 福岡市教育委員会指導部 文化課

三島 格、石橋 博、岩下拓二、田坂美代子

調査にあたっては、福岡市教育委員会の三島主事と田坂技師の適切な指導と便宜をいただき、また福岡大学当局には諸経費、発掘機材の貸与およびその他の多大な協力をいただいた。ここに御協力をいただいた関係諸機関に対して、謝意を表するものである。

3. 調査の記録

1) 七隈古墳群の立地

七隈古墳群の立地する丘陵裾部には、五ヶ村池、十一池、弓池および弓掛池などが造られている。十一池東側から五ヶ村池に向かって伸びる丘陵に3基の古墳が並んでいた。すなわち、丘陵先端部近くに第1号墳、その南約100mを隔てた最高位に第2号墳、さらに南約100mの地点には第4号墳が築かれていた。これらの古墳が立地する丘陵と谷一つ隔てて東側に位置する丘陵の最高地には第3号墳が存在していたと思われるが、すでにその跡は失われていた。さらに第3号墳の西南方丘陵斜面には第8号墳が存在する。これらの丘陵と十一池を挟んで対峙する西側の丘陵には、北側の高地に第5号墳、約100mを隔てた南側の高地に第6号墳が築造されている。第7号墳は十一池に向かって南方より伸びる丘陵頂部に立地している。

これらの古墳の内、第1号墳～第4号墳はすでにブルドーザーによって破壊されており、転落している石室の石材や採集された遺物などで古墳が存在していたことを知りうるのみである。したがって今回発掘調査を実施した古墳は、すでに記したように第5号墳と第6号墳の2基で



Fig.11 七隈古墳群配置図（縮尺1/5,000）

あるが、造成工事進行中に第4号墳付近から金環1個が採集されている。銅芯に鍍金を施したもので、長径1.7cm、短径1.5cm、断面は長さ0.7cm、最大部分の厚さ0.4cmの長楕円形をなし、比較的小形の金環である（Fig.12、P.L.22）。

このように七隈古墳群は8基から構成されていたと考えられるが、立地的には油山北麓古墳群の中で最も先端部を占めている。特に第5号墳と第6号墳は、七隈古墳群の中でも最も平野部に近く、立地的に群形成の最初の段階のものであることを推測させるものである。

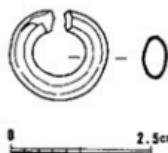


Fig.12 4号墳出土金環
実測図（実大）

2) 第5号墳の調査

古墳の構造（P.L. 7~10）

開墾のために墳丘裾部北側部分および墳頂部が削平されており、墳丘はかなり変形を受けているものと考えられた。現存の外形は長径16m、短径15m、高さ2.5mの規模で、墳丘西半部に大きな陥没孔があり、当初よりすでに盜掘を受けていることが知られた。

墳丘ならびに石室の構造を究明するため、墳丘中央部より南西方向へ幅2m、長さ5mのトレンチを設定し発掘作業を進めた。しかしながら、現在の墳頂部から南西方向へ2m50cmの地点までは搅乱を受け、盛土層や石室の構築石材を検出しえなかった。墳頂下2m20cmで花崗岩風化土の地山に達し、それに至る過程で搅乱層中より須恵器片、鉄器片、玉類などが出土した。トレンチ北東壁より2m50cmから版築状の土層が認められ、築造当時の盛土と考えられる。この位置のトレンチ中央部に完形の高杯と甌が立った状態で出土し、これを第1群須恵器とした。また、その部分より西方50cmのトレンチ両側に、杯、高杯を主体とする第2群と第3群須恵器が約1m隔てて検出され、各々、墳丘裾部に埋置されていたと考えられる。

墳頂部から北東方向にトレンチを延長し発掘を行なったが、搅乱を受けており、石室の構築状態を検出することはできなかった。

以上のように第5号墳は、すでに大きな搅乱を受け、墳丘を縱断したトレンチにおいては、古墳の構造を知り得るような所見は得られなかった。また、トレンチによる部分的な発掘調査という限界性ゆえに、本墳の保存状態、破壊状態を全体的に明らかにしないまま調査を終える結果になった。

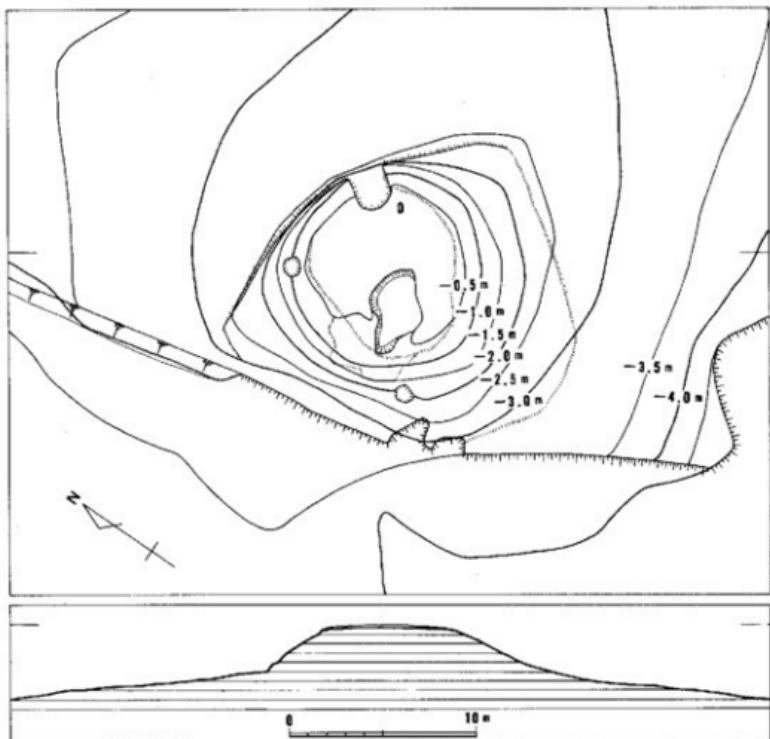


Fig.13 第5号墳丘実測図（縮尺1/300）

出 土 遺 物

出土した遺物には、須恵器、鉄製品、玉類がある。この内、盛土裾部より出土した第1群～第3群須恵器は、後世の搅乱を受けず、埋置された時点の状態をそのまま残していると考えられる。その他の須恵器、鉄製品、玉類などは、後世の搅乱を受け、散乱した状態で検出された。

須恵器 (Fig.14～17、P.L.19～21)

第1群須恵器がS-27～S-28、第2群須恵器がS-1～S-9、第3群須恵器がS-10～S-26であり、S-29～S-36は搅乱層中より出土したものである。

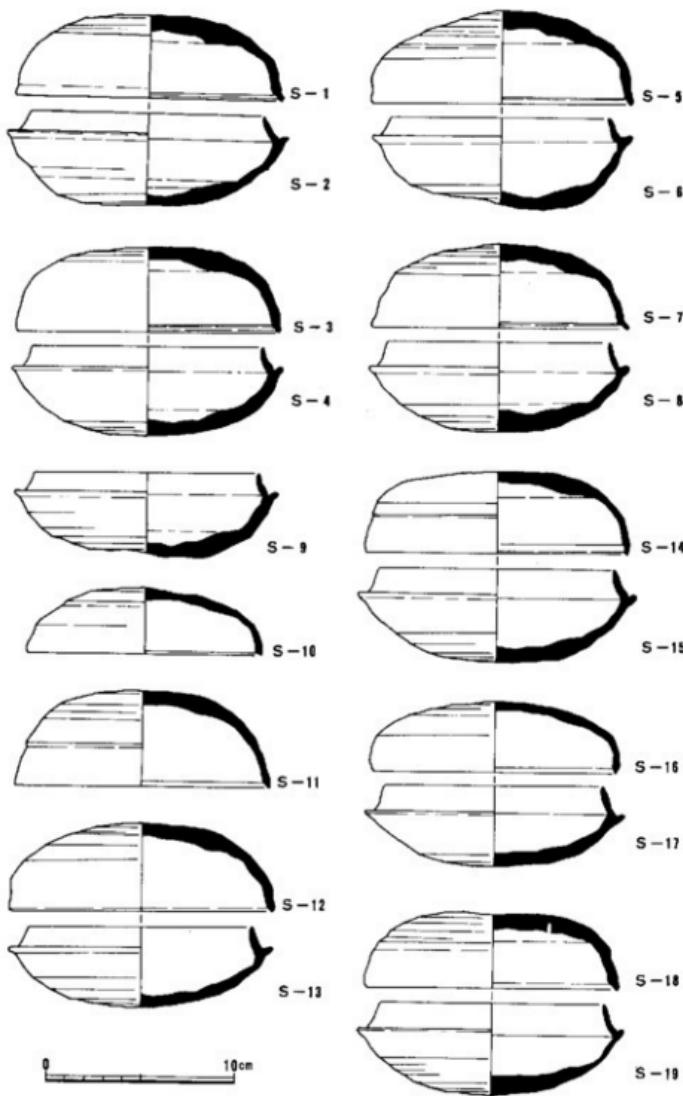


Fig. 14 第5号墳出土須恵器実測図 I (縮尺1/3)

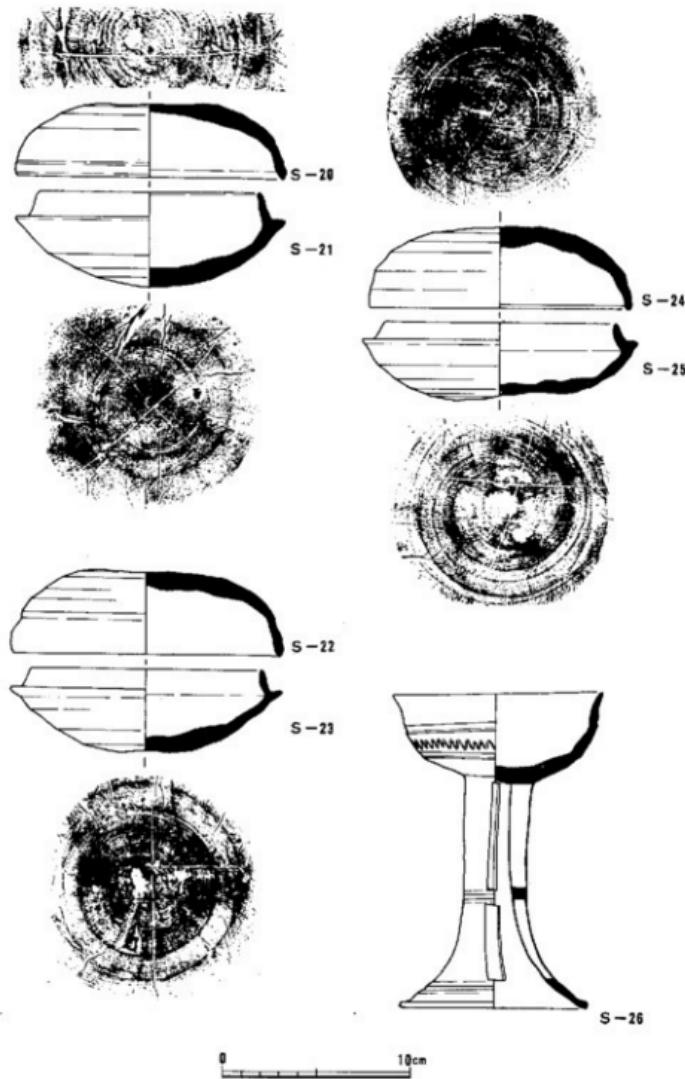


Fig. 15 第5号墳出土須恵器実測図II (縮尺1/3)

坏

■ 形態、手法、胎土、焼成などの諸特徴から、5つの型に分類できる。

A類 (S-11、S-14、S-18、S-22、S-24)

口径13.6~14.3cm、器高4.4~5.2cmに含まれ、ゆるやかにカーブして伸びる天井部がいったん稜をなし、やや直行気味の体部に続き、古式の形態の名残りをとどめるものである。稜はすでに鋭さを失ない、凹線によって稜をつくり出すか、成形の際、意識的にそれを示すものである。口辺部の伸びも小さく、端部は鋭さを欠いている。まき上げ、ミズビキによる成形、天井部外面の回転ヘラ削りは3分の2の範囲に施されている。口辺部は回転ヨコナデによる調整、天井部内面はナデによる仕上げである。ロクロの回転方向は、S-14以外はいずれも順時計まわり、S-22とS-24は天井部外面にヘラ記号が付されている。

B類 (S-1、S-3、S-5、S-7)

口径14.0~14.2cm、器高4.4~5.0cmのもので、天井部のカーブがそのまま体部に続き、境に後をつくらない。特徴的な点は、口縁端部がやや外反し内側に凹線による明瞭な段をつくることである。成形、調整の手法はA類と同様であり、ロクロの回転方向も順時計まわりである。焼成は堅緻でしっかりしている。

C類 (S-12、S-20)

口径14.2cm、器高4.1~4.8cmのもので、天井部から体部にかけての形態はB類に類似する。口縁端部はA類と同様に鋭さを欠き、丸味を帯びている。焼成は不良で器面は風化が著しい。手法上の特徴はA類、B類と同様であるが、より粗雑なつくりである。S-20の天井部にはヘラ記号が付されている。

D類 (S-10、S-16)

口径12.6cm~13.2cm、器高3.6~3.8cmに含まれ、小形化、扁平化しているものである。天井部と体部の境は明瞭さを欠き、カーブしながらのびる天井部が短く内弯気味の体部に続く。口縁端部は凹線による段をわずかに残している。成形、調整の手法はA~C類と大差ないが、胎土と焼成において異質である。全体に粗雑で変形している。

E類 (S-29)

この1点のみを検出した。かえりを有するものでA~D類とは型式を異にする。天井部は一段ふくらみ、頂部は平坦である。かえりの先端は口縁端部よりやや内側の線に入る。天井部中央を含め器の全体の4分の3を欠損しているが、つまみを有するものではない。天井部外面はふくらみの位置までヘラ削りが施され、口縁端部までは回転ナデによる調整を受け、内面も中央付近まで同様であるが、中央部はナデによっている。かえりは、はり付けによってつくられている。

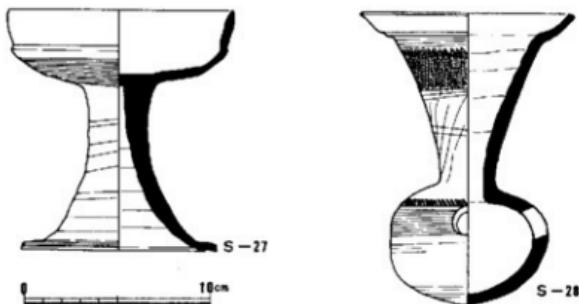


Fig. 16 第5号出土須恵器実測図III (縮尺1/3)

身 蓋と同様に顕著に形態的な差異を認めることはできない。わずかな法量や細部の微妙な変化と、手法、胎土、焼成などの特徴を合わせて、あえて分類すれば次の4類に分けられよう。

A類 (S-15、S-19)

口径12.2~12.6cm、器高5.0~5.1cm、立ち上がり高1.4cmのもので、最も法量の大きいグループである。立ち上がりは器肉が薄く、接合部よりやや外寄り気味に口縁端部にのびており、内面の接合部には明瞭な棱線が入る。底部は中央部に平坦面をつくらず、ゆるやかなカーブで蓋受部に統く。底部の回転ヘラ削りは全体の3分の2の範囲にわたって施されており、ロクロ回転の方向はいずれも逆時計まわりと観察される。底部外面の残りの部分と内面や立ち上がりは回転ヨコナデ、底部内面中央部はナデによる調整で、胎土は精良、焼成は普通である。

B類 (S-2、S-4、S-6、S-8~9)

口径11.8~12.3cm、器高4.6~5.0cm、立ち上がり高1.0~1.3cmにおさまり、A類に比べて法量がやや小さく、立ち上がりの高さも小さい。立ち上がりの外寄りはA類より大きく、蓋受部との境には凹線が浅く入る。内面のはり付け部には明瞭な稜線が入る。成形、調整の技法はA類と同様であるが、底部の回転ヘラ削りは全体の2分の1の範囲で、中央部をやや平坦な感じにしている。ロクロ回転の方向はいずれも順時計まわりと観察される。胎土に粗い石粒を多く含み、器面上に浮き出る。焼成は堅緻で青味がかった灰色を呈する。

C類 (S-13、S-21、S-23、S-25)

口径11.8~12.4cm、器高4.0~5.1cm、立ち上がり高1.0~1.1cmにおさまるもので、法量はB類とはほぼ同等であるが、立ち上がり中位の器肉がやや厚く、内面の接合部に棱線が入らない。また、底部外面の回転ヘラ削りの範囲は4分の3にわたっている。ロクロ回転の方向はいずれも順時計まわりである。胎土、焼成、色調はA類に類似する。S-13、S-21、S-25にはへ

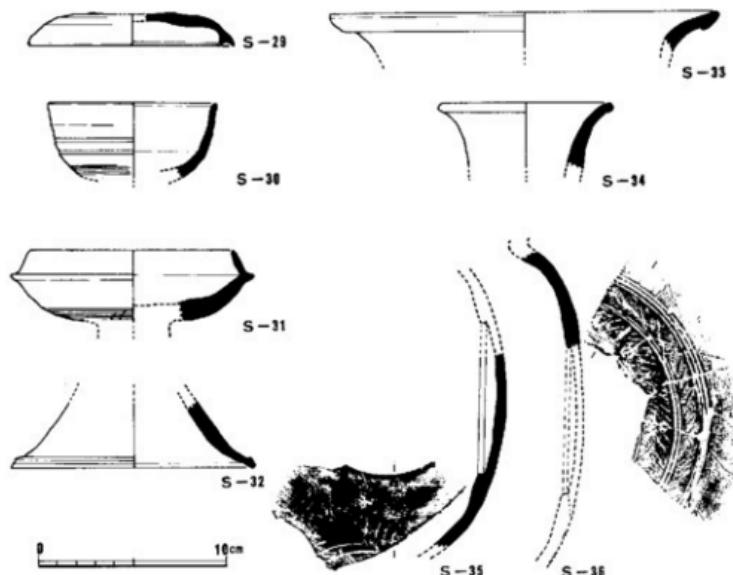


Fig. 17 第5号墳出土須恵器実測図IV (縮尺1/3)

ラ記号が付されている。

D類 (S-17)

S-16の蓋とセットをなして出土したもので、A～C類と形態、手法において大差ないが、小形化していることや、胎土、色調の違いで区別される。胎土に細かい石粒が多く含み、色調は紫がかった暗灰色を呈する。底部外面の回転ヘラ削りは全体の2分の1の範囲で、ロクロ回転の方向は順時計まわりを示している。全体に粗雑な感じである。

高 坯 (S-26～27、S-29～30、S-32)

S-26は無蓋高坯の完形品で、坯部は底部からゆるやかにカーブしながら立ち上がり、口縁部中位で外弯して端部を開く。口縁部から底部中位まで回転ヨコナデ、底部下半はナデによる調整で、口縁部との境および底部下半は凹線で画され、その間には浅く細かい櫛描波状文がめぐらされている。脚部は細い基部から長くのび、裾部でラッパ状に開いて端部を丸くつまみ出す。内面は端部よりいったん内弯しつつ基部へ続く。脚部中位と裾部には凹線がめぐり、その間に長方形の二段透孔が3方向に切り込まれている。脚部の調整は外面中位までナデ、下半部は内外面ともに回転ヨコナデである。

S-27も無蓋高坯であるが、坯部は器高に対する口径の比率が大きく、脚部に透孔を有しな

い。环部の形態は、底部はゆるやかなカーブをなして外広し、口縁部との境に段をつくり出す。口縁部はやや肥厚して端部に立ち上がる。底部外面はカキ目が施され、口縁部は回転ヨコナデ調整、内底部はナデの後、×のヘラ記号が付されている。脚部は基部から外窩しつつのび、端部において横に開く。外面は巻き上げ痕が明瞭で回転ヨコナデによる仕上げである。

S-30は坏部3分の1を残す破片で、復原口径8.6cmを測る。底部に2条の凹線がめぐり、口縁部中位に稜線を残す。胎土は精良で、赤茶色を呈す。S-31は有蓋高坏の坏部片で、蓋受けの立ち上がりが高い。底部下半はカキ目が施され、2条の平行線によるヘラ記号が認められる。S-32は脚裙部のみの細片で、ラッパ状に開く裙部は下端に凹線をめぐらして端部を丸くつくり出す。回転ヨコナデ調整である。

龜 (S-28)

体部に比べ口頭部ののが著しい龜である。接合部より口頭部はやや外窩しつつラッパ状にのび、口縁部との境を凹線によって段をつくり、口縁部はそこから屈曲して外広する。頭部上半部に櫛搔波状文がめぐり、下半部はカキ目のあとナデている。また、体部に挿入する際のねじり痕が明瞭に残る。体部は肩がやや張り、肩部に1条の凹線と櫛搔压点文をめぐらしている。体部中位はカキ目、下半部は回転ヘラ削りによる調整である。

壺 (S-33)

復原推定口径20.6cmの短頭部片で、口縁端部は玉縁状に折り返す。胎土は精良で焼成も堅緻である。

Tab.1-① 第5号墳出土須恵器法量表

単位：cm

No.	出土位置	器種	分類	法量	胎土	焼成	色調	備考	挿図	図版
S-11	第3群	蓋A類	口径13.8：器高5.2	粗砂少量	普通	灰色	S-14はロクロ回転は順時計まわり、他は逆時計まわり S-14、S-22、S-24にヘラ記号あり	Fig.14 Fig.15	PL.21 PL.19 PL.20	
S-14			口径14.0：器高4.5	粗砂多量	不良	灰色				
S-18			口径13.6：器高4.0	粗砂多量	普通	灰色				
S-22			口径14.3：器高4.5	粗砂少量	普通	灰色				
S-24			口径14.0：器高4.4	粗砂少量	普通	灰色				
S-1	第2群	蓋B類	口径14.2：器高4.4	粗砂多量	普通	淡灰色	口縁端部はやや外窓内側に凹線、棱をつくる。ロクロ回転は順時計まわり	Fig.14 Fig.15	PL.19	
S-3			口径14.0：器高5.0	粗砂多量	普通	淡灰色				
S-5			口径14.0：器高5.0	粗砂多量	普通	淡灰色				
S-7			口径13.8：器高4.5	粗砂多量	普通	淡灰色				
S-12	第3群	蓋C類	口径14.2：器高4.8	粗砂多量	不良	灰色	ロクロ回転順時計 S-20にヘラ記号	Fig.15	PL.20	
S-20			口径14.2：器高4.1	粗砂多量	不良	灰色				
S-10		蓋D類	口径12.6：器高3.6	粗砂多量	普通	紫灰色	ロクロ回転順時計	Fig.14		
S-16		蓋E類	口径13.2：器高3.8	粗砂多量	普通	紫灰色				
S-29	複合	口径9.4：器高2.2	粗砂多量	普通	黑色	黑色	口縁内側にかえり	Fig.17	—	

Tab. 1-② 第5号墳出土須恵器法量表

単位: cm

No.	出土位置	器種	分類	法量	胎土	焼成	色調	備考	挿図	図版
S-15	第3群	身A類		口径12.6: 器高5.1 たち上がり高1.4	精 良	普 通	灰 色	ロクロ回転逆時計	PL.19	
S-19				口径12.2: 器高5.0 たち上がり高1.4	精 良	普 通	灰 色			PL.20
S-2	第2群	坏身	身B類	口径12.3: 器高4.9 たち上がり高1.1	粗 砂 多 量	普 通	淡 灰 色	回転ヘラ削りの範 囲は全体の4%、 ロクロ回転順時計	Fig.14	
S-4				口径12.2: 器高4.8 たち上がり高1.1	粗 砂 多 量	普 通	淡 灰 色			
S-6				口径11.8: 器高5.0 たち上がり高1.0	粗 砂 多 量	普 通	淡 灰 色			
S-8			身C類	口径12.0: 器高4.8 たち上がり高1.3	粗 砂 多 量	普 通	淡 灰 色	回転ヘラ削りの範 囲は全体の4%、 ロクロ回転順時計	PL.19	
S-9				口径12.0: 器高4.6 たち上がり高1.0	粗 砂 多 量	普 通	淡 灰 色			
S-13				口径12.0: 器高4.4 たち上がり高1.1	精 良	普 通	灰 色			
S-21	第3群		身C類	口径11.8: 器高5.1 たち上がり高1.2	精 良	普 通	灰 色	回転ヘラ削りの範 囲は全体の4%、 ロクロ回転順時計	Fig.15	PL.20
S-23				口径12.3: 器高4.5 たち上がり高1.1	精 良	普 通	灰 色			
S-25				口径12.4: 器高4.0 たち上がり高1.0	精 良	普 通	灰 色	S-13, S-21, S-25にはヘラ記号 あり		
S-17			身D類	口径11.8: 器高5.1 たち上がり高1.3	細 砂 多 量	普 通	紫 灰 色	ロクロ回転順時計	Fig.14	
S-26	無蓋			口径11.5: 器高7.0 环高 4.6: 脚径10.6	細 砂 少 量	普 通	暗 灰 色	环部に櫛目文 脚部に2段の透孔	Fig.15	PL.21
S-27				口径11.5: 器高7.0 环高 4.6: 脚径10.0	細 砂 少 量	不 良	赤 茶 色	底部にカキ目 内面にヘラ記号		
S-32	複乱高坏	有蓋		口径10.4*: 蓋高1.3	細 砂 少 量	普 通	灰 色	ヘラ記号あり	Fig.17	---
S-31				脚径13.0*	精 良	堅 織	黑 黑 色	脚端部に凹線		
S-30		高坏		口径 8.6*	精 良	不 良	赤 褐 色	底面部に凹線		
S-28	第1群	越		口径11.0: 器高15.8	精 良	普 通	灰 色	彫描文を施す	Fig.16	PL.21
S-33	複乱	蓋		口径20.6*	精 良	堅 織	黑 黑 色	口頂部破片	Fig.17	---
S-34		粗版		口径 8.8*	精 良	軟 質	灰 色	口頂部破片		
S-35				はり付粘土板径 8.0*	粗 砂 少 量	普 通	灰 色	体部の破片 S-36		
S-36				はり付粘土板径 8.0*	精 良	軟 質	灰 色	はカキ目、彫描文		

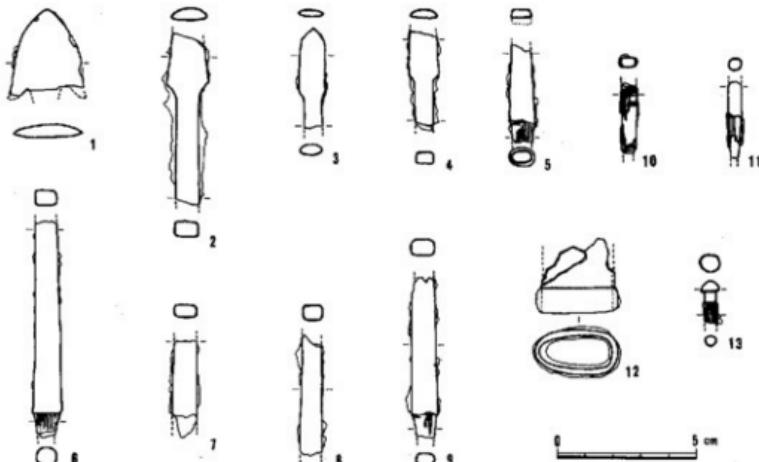


Fig.18 第5号出土鉄製品実測図（縮尺1/2）

提瓶（S-34～36）

S-34は口頭部の破片で、外弯してのびる頸部から口縁端部を丸くおさめる。胎土は精良であるが、焼成は不良で器面は風化している。S-35は体部の破片であり、成形は扁平な壺をつくった後、粘土円板で中央部の口をふさぐ手法であることが知られる。体部外面は細かいカキ目、内面は叩きのあと回転ヨコナデ調整、はり付け部はナデ調整である。S-36も体部の破片であるが、円板ははり付け部を丸く欠損する。外面はカキ目のあと、中央部を中心に2条と3条を単位とする凹線を2段にめぐらし、その間に横描波状文を各々めぐらす。内面はヨコナデ調整である。

鉄製品（Fig.18、P.L.22）

鉄鎌（1～11）

いずれも欠損品で全体の形状を知りうるものはない。1が平根式で他はすべて尖根式の鉄鎌である。1は三角形楊挾式のもので、関部と茎の部分を欠損する。現長2.9cm、幅2.6cmを測り、刃部は鎌をもたない。2～4は剣形両闇式のもので、刃部と笠被の部分を残す。2と4が両丸造で、3は平造である。笠被の断面は長方形を呈す。2は身幅1.5cm、笠被部の長さ0.8cm、幅0.5cm、3は身の長さ2.3cm、幅0.8cm、4は身幅1.0cmである。5～9は笠被部から茎部にかけての欠損品で、笠被部の断面は長方形、茎部は円形をなす。10～11は茎部の残欠であり、矢柄の竹材を鍛着する。

柄金具（12）

破片のため全体の形状は不明であるが、刃の柄前に着装される金具と考えられる。鉄板を折

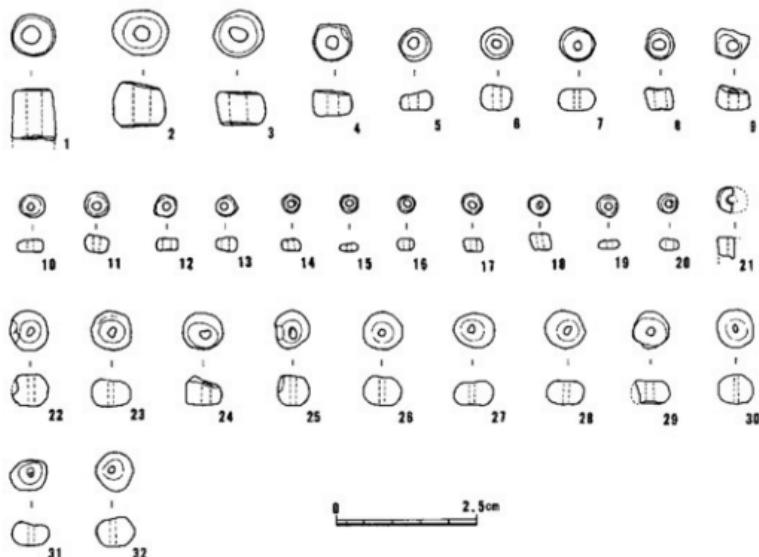


Fig.19 第5号墳出土玉類実測図（実大）

Tab.2 第5号墳出土玉類計測表

単位:mm

No.	種類	材質	径	長さ	孔径	色調	備考	No.	種類	材質	径	長さ	孔径	色調	備考
1	管玉	ガラス	7.9	9.0	2.6	にぶ緑	約半分欠	17	小玉	ガラス	3.4	2.3	1.0	うすい緑	両端研磨痕
2	小玉	ガラス	9.2	7.9	2.3	濃緑	大形品	18	"	"	3.1	3.0	1.3	うすい青緑	孔は斜め
3	"	"	8.5	5.6	2.7	墨	上下端に研磨痕	19	"	"	3.7	1.8	1.0	うすい青	両端研磨痕
4	"	"	6.7	4.3	2.4	墨	"	20	"	"	3.7	2.0	1.2	うすい紺	両端丸味
5	"	"	5.8	2.9	1.6	にぶ青	"	21	"	"	4.6	3.2	1.6	うすい青	半分以上欠
6	"	"	5.6	4.2	1.3	明黄橙	全体に丸味	22	土玉	土	7.2	5.5	1.3	黒灰青色	やや欠損
7	"	"	6.2	4.1	1.1	うすい緑	"	23	"	"	7.0	4.8	1.2	"	"
8	"	"	5.0	3.9	2.1	あわい経青	孔は斜め	24	"	"	7.0	5.1	1.4	"	"
9	"	"	6.0	4.1	1.7	墨	上下端に研磨痕	25	"	"	6.8	5.2	1.9	"	全体に丸味
10	"	"	4.5	2.2	1.2	あわい緑青	やや扁平	26	"	"	6.8	5.2	1.1	"	"
11	"	"	4.2	3.2	1.5	にぶ青	"	27	"	"	7.4	4.7	1.3	"	"
12	"	"	3.8	1.9	1.1	うすいにぶ青	やや扁平	28	"	"	7.0	4.7	1.1	"	"
13	"	"	3.6	2.9	1.0	"	"	29	"	"	6.8	4.1	1.4	"	やや扁平
14	"	"	3.1	2.2	1.2	うすい木色	"	30	"	"	7.0	5.2	1.1	"	全体に丸味
15	"	"	3.0	1.2	1.1	うすい紫紺	やや扁平	31	"	"	7.1	4.8	1.4	"	"
16	"	"	2.6	2.1	0.9	"	全体に丸味	32	"	"	6.9	5.2	1.1	"	全体に丸味

りまげ、断面長卵形につくられている。基部に幅0.7cmの隆帯をつくり出し、内側には木質が接着している。基部での長さ2.9cm、幅1.7cmを測り、厚さは0.2cmである。

鉢金具(13)

頭部が半球状を呈し、半分より以下に木質が接着する。現長1.5cm、断面径0.4cmを測る。

玉類(Fig.19、PL.22)

搅乱層および排土の水洗によって検出された玉類は、管玉1、小玉20、土玉11であり、これらの形状はTab.2に記すとおりである。

3) 第6号墳の調査

古墳の構造

墳丘(Fig.20、PL.12)

第5号墳をのせる同一丘陵の西南100mの頂部に立地し、墳頂部の標高36.7mを測る。墳丘概部に近い西側と南側部分が削り取られているが、ほぼ全形を残している。現状の外形より、墳径22m、高さ3mの円墳である。しかしながら、盛土部の全面露出および墳丘のカットによる調査をなしていないので、正確な墳丘の構造を知り得ない。ただ、石室の調査過程では、本古墳は自然地形の高まりを利用し、花崗岩風化土壌の地山に築造されたものであり、墳丘は黄褐色粘質土と灰色粘土を交互に盛って形成されたことが知られた。

石室(Fig.21、PL.13・14)

墳丘中央部の玄室部が長さ6.5m、幅1.5mの範囲にわたって陥没しており、その部分から南側に通路状の掘り込みがあつて、すでに石室は破壊され、天井石などの石室構築石材は持ち去られていた。玄室内には側壁の石材が落ち込んでおり、床面も破壊され、敷石などは検出されなかった。調査は玄室部の落石除去から清掃作業および実測と、破壊を受けていない羨道部の発掘を行ない、羨道の調査は途中まで終了した。

石室は単室の両袖型横穴式石室である。主軸の方位はN91°Wにとり、ほぼ真西に開口する。玄室部は大規模な破壊を受け、周壁の石積は北側が2段、南側は1段を残すのみで、奥壁も1段である。側壁は長さ100cm~50cm、高さ70cm~50cmの花崗岩を使用し、北側壁4枚、南側壁5枚を組み合わせて腰石となしている。奥壁は3枚の石材を使用したと思われるが、中央部と

北側の2枚を残すのみである。中央部の石材の大きさは、長さ150cm、高さ80cmほどである。玄室の規模は地山の面において主軸長328cm、中央部幅260cm、袖石に接する位置における幅は220cmを測る。南側壁が奥壁に向けてやや開き、袖石もわずかにずれているが、長方形プランを呈する大形の石室である。石材に加工痕は認められず、自然転石を利用したものと考えられる。

羨道部は両側の袖石に連続して各3枚の石材を並べて腰石となし、2段目はやや小形の扁平な石材をひかえ積みしている。腰石は玄室の石材と同様な大きさのものを使用している。羨道部の長さ190cm、幅70cm、2段までの高さ80cmを測る。閉塞石は玄門から約110cmの位置に、柱状の石材を2段横積みし、間隙を人頭大の礫石で塞いでいる。この位置より約50cmを隔て、羨

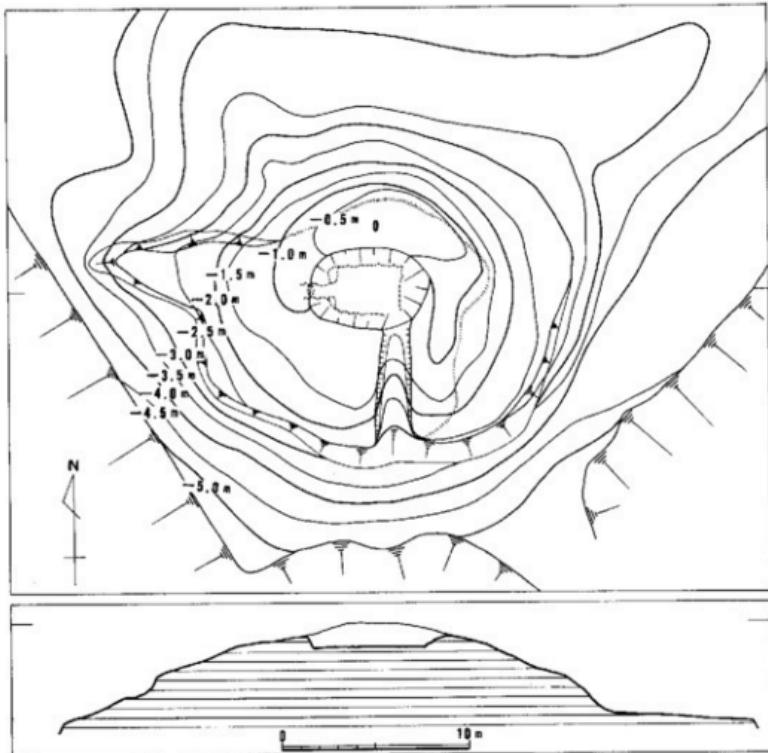


Fig.20 第6号墳地形実測図（縮尺1/300）

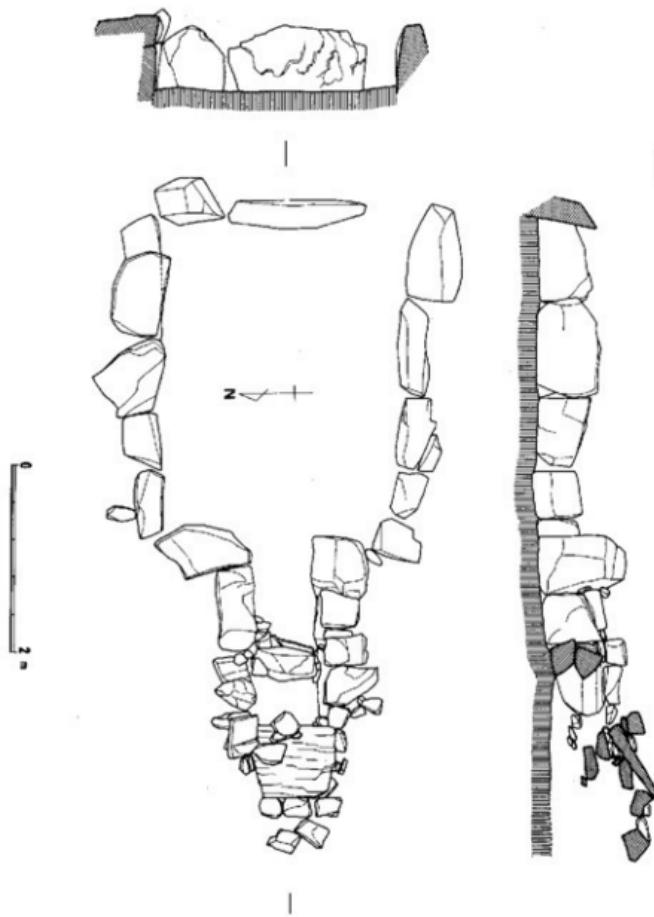


Fig. 21 第6号填石室実測図(縮尺1/60)

道部上面のレベルにおいて略90×80cm、厚さ15cmほどの扁平な頁岩質の石材が動かされた状態で検出された。おそらくこの石材は閉塞部に立てかけられていたものであろう。

墓道は狭道部石組先端部から地山をU字形に掘り込んでつくられている。完掘していないので全体的な構造は不明であるが、地山に沿って西側に傾斜し、墳丘裾部の南側へ曲がる状態を示している。

本石室は、長方形プランの大形な玄室と、短い狭道を付設することから、古式の形態をもつ横穴式石室である。玄室の床面は狭道部より一段低くなっているが、床面まで破壊されていたために、敷石その他の施設を検出できなかった。

出土遺物

本墳も大規模な破壊を受けていたため、出土遺物の種類も量も少ない。玄室の清掃中、中央部より玉類、袖石付近より土師器片を採集した。また、狭道部の発掘では、先端部から墓道

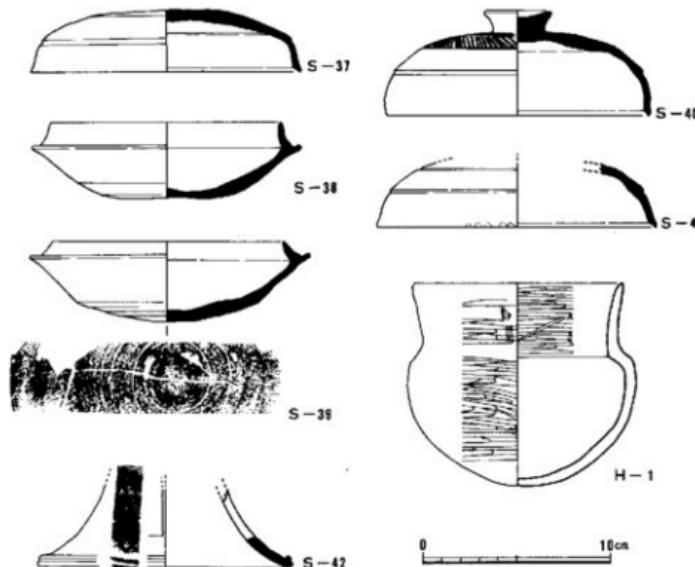


Fig.22 第6号墳出土土器実測図（縮尺1/3）

にかけて少量の須恵器を検出したが、石室内部からは須恵器は出土しなかった。

須恵器 (S-37~41)

坏蓋 S-37は坏蓋で口径14.4cm、器高3.3cmを測る。全体に扁平な感じであり、天井部と体部の境は凹線によって稜をつくり、口辺部はそこより短くすぼまる。巻きあげ、ミズビキ成形で、天井部のヘラ削りは2分の1の範囲まで施されており、稜部まではヨコナデ、口辺部と天井部内面の半分ほどまで回転ヨコナデ、中央部はナデ調整である。S-38は坏身で4分の3以上を欠損する。復原口径12.2cm、器高4.0cm、立ち上がり高1.2cmを測る。立ち上がりは外窓しつつ口端部にのび、はり付け部内面に稜線を残す。底部は2分の1の範囲がヘラ削り、内面はナデ調整である。胎土は精良、焼成も堅硬で、内面は灰色、受部の稜から底部は黒灰色を呈す。S-39も坏身で全体の3分の1を欠損する。口径は12.4cm、器高4.3cm、立ち上がり高0.6cmで、立ち上がりはS-38に比べ内傾度が大きい。底部は回転ヘラ削りが2分の1の範囲に施され、その部分を境にして外窓しつつ受部にのびる。ロクロ回転の方向は順時計まわりで底部にヘラ記号が付されている。胎土に砂粒を含み、内面は暗灰色、外面は灰色を呈す。

高坏 S-40は蓋の完形品で、口径14.2cm、器高5.7cmを測る。天井部は丸味をもち、体部との境に凹線による稜をつくる。口辺部はやや内窓しつつ立ち、口縁端部内側に段をつくる。つまみは逆台形をなし頂部が凹む。天井部中央部は櫛押圧点列文をめぐらしている。S-41は口辺部から天井部にかけての細片で、復原推定口径15.0cmを測る。天井部には櫛押圧文がめぐり、体部との境は鈍い稜を残す。口縁部はやや外に開き、調整は回転ヨコナデである。S-42は脚部の破片で、復原脚径13.6cmを測る。ラバ状に外窓して開く脚端部をはね上げて稜をつくり縫部に凹線がめぐる。方形の透孔があり、捺描波状文が施されている。内面の調整は回転ヨコナデ、焼成は堅硬である。

土師器 (H-1)

直口壺で底部を欠損する。口径11.2cm、復原器高11.0cmで、体部は丸く肩が張り、口頭部はやや外窓しつつ立ち上がって口縁端部を丸くおさめる。内面の口頭部と体部の境に稜をもつ。外面全体と口頭部内面は丹塗研磨され、体部内面はナデ調整である。

玉類 (Fig.23, PL.22)

3個検出したにすぎない。いずれもガラス製小玉で保存状態は良い。1、2は各々最大径が8.8mm、7.7mm、長さ5.1mm、6.0mmを測り、1は濃紺、2は紺色を呈す。3は最大径3.8mm、長さ2.2mmで暗い紺色を呈す。

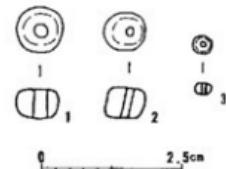


Fig.23 玉類実測図(実大)

4) 第8号墳の調査

調査の概要

本墳は油山から北に向かって張り出した丘陵の西側斜面に築造されていたと思われるが、発掘着手前の古墳周辺は造成工事によって著しく削平されていたため從前の地形を充分に復原することができなかった。また墳丘は西側の一部を除いてブルドーザーにより削り取られており、石室も一部破壊されて天井石やその他の石が石室内に落ち込んだ状況であった。

調査はまず、わずかに墳丘の残っていた西側斜面の雑木の伐採に始まり、続いて石室内に落ち込んだ天井石等の石材の除去と石室プランの確認を行なったが、漢道部付近は特にブルドーザーによる搅乱が著しく、その検出は困難を極めた。又、墳丘の断面観察のためにトレンチを西側に1本、墓壙検出のために北側に2本、東側に1本設定した。並行して石室内部の堆土、遺物の検出、清掃を行ない、併せて漢道部から石室外に向かって厚く堆積した灰黒色土層の状態を観察するために、南側の石室外にトレンチを設けて発掘を進めた。

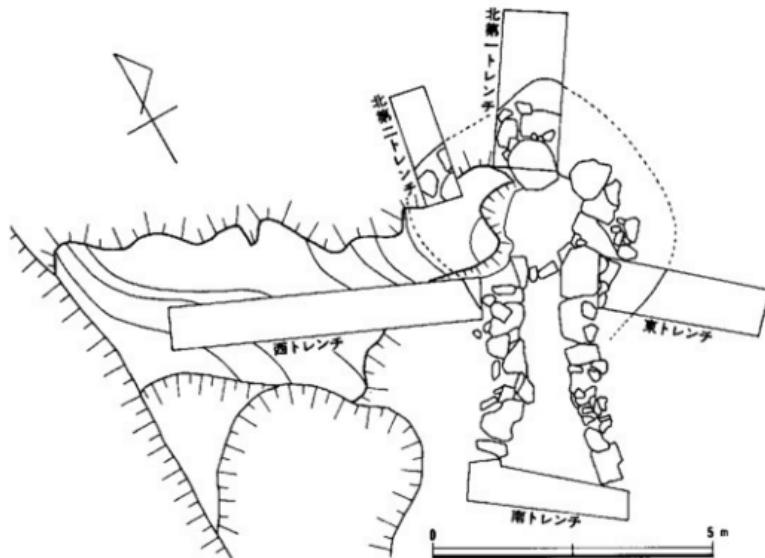


Fig.24 第8号墳地形実測図（縮尺1/100）



Fig.25 第8号墳石室実測図（縮尺1/60）

残暑厳しい中、調査前のブルドーザーによる破壊、発掘器材の不足、調査員の未熟さもあって充分な調査ができず、不完全な面を残すことになったのは残念であった。

古墳の構造

墳丘と墓壙 (Fig.24、P.L.15・16)

墳丘の調査は、既にその大半が破壊されていたため、わずかに残った西側にトレンチを設定して観察をするにとどまった。表上は西へ向かうにつれて厚くなり約1mにも達するが、これは墳丘の流失のためと思われる。旧地表と推定されるのは淡褐色砂質土層で、この層から墓壙が掘り込まれている。これより上部には灰褐色砂質土層、その上に褐色砂質土を積んで封土としているが、特別な構築方法はとられず版築等は認められなかった。ただ盛土中から縄文式土器片（曾畠式）、弥生式土器片、石斧等が出土し、近くにそれらの遺跡の存在することが推定される。上記のように規模は明確にし得なかつたが、現存部あるいは石室の大きさから考えて径10m前後的小円墳であろうと推定される。高さはトレンチでの盛土が旧地表から約1.1mほど現存しており、石室の天井部がそれより高いことから2m前後ではないかと思われる。

墓壙は各トレンチによる部分的な調査であるため正確な規模を知り得なかつた。北・東トレンチでは地山のマサ土に掘り込まれ、現存する深さ約0.6~0.7mを測るが、本来腰石がかくれるほどの深さであったと思われる。西トレンチでは上述したように淡褐色砂質土層から掘り込まれ深さ約0.5mを測るが、北・東トレンチのように地山まで達していない。これは地山が西方に傾斜し、西側に向かうにつれて地山の上に粘質土が堆積しているためと思われる。したがつて墓壙は、東および北東側においては地山のマサ土を、西および南西側は粘質の堆積土を切り込んで掘られ、地形上東側が深く西側が浅い形状を呈していたと思われる。平面形は玄室部付近では径約5mの不整円形を呈すると推定されるが、羨道部付近は明確にし得なかつた。墓壙内部には人頭大の石が嵌め込めて使用されていたが、堆積する土はあまり固くなかった。

石室の構造

石室は主軸をS32°Eにとり、ほぼ南南西に開口全長5.1mの単室の横穴式石室であり、丘陵の西側斜面、すなわち等高線とはほぼ平行して構築され、入口は油山の方向を指す。

玄室 (Fig.25、P.L.18)

平面プランは不整正方形を呈し、奥壁幅と左側壁長はともに1.85mであるのに対して、玄門部幅は1.6mと狭く、右側壁長は1.7mと短い。奥壁の石積みは基部に大きめの石を腰石として据え、その上に漸次ひとまわり小さい石を2段積み上げている。持ち送りは2段目から次第に顕著となっている。天井部は奥壁と側壁の石が挟まって不整円形を呈し、1枚の石で架構されていたと推定される。その高さは現存高の2mとほぼ一致すると考えられる。積石の間隙には小礫が詰められ、奥壁および右側壁外面の一部には白色あるいは黄色枯土の目張りが認められる。床面には敷石らしきものは見られなかつた。玄門部は袖石が両側よりもともに0.5m張り出しており、玄門幅は0.6mを測る。床面には幅0.25m、高さ0.15mの間仕切り石が据えられ羨

道と玄室を画している。

羨道 (Fig.25, PL.18)

長さ3.1mを測り、幅は外に向かって次第に広がり最大0.95mである。側壁は玄室と同様に基部に大きめの石を腰石として使用し、その上にひとまわり小さい石を1段あるいは2段積み上げている。しかしながら、玄室に比べ石積みは粗雑で石材も小さい。天井石は現存しないが、



1. 南トレンチ土層図

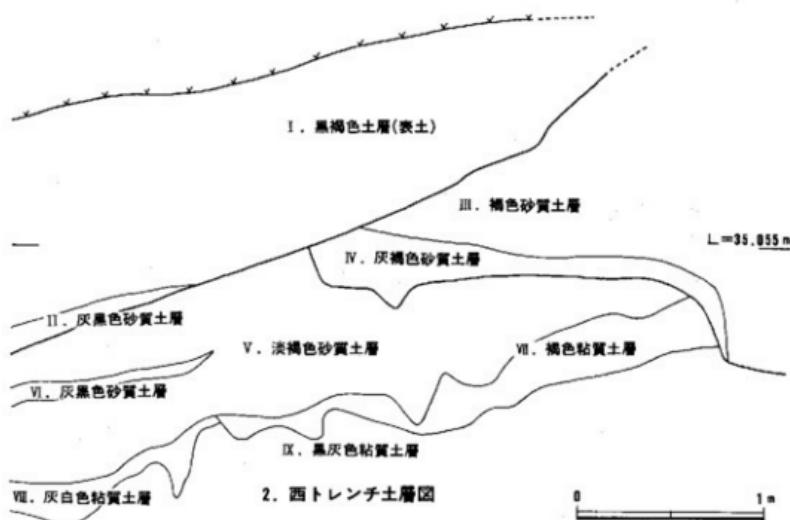


Fig.26 墓丘土層図 (縮尺1/30)

左側壁は著しく原形を損っているとは認めがたい。

閉塞石は玄門から0.85mの位置にあり、人頭大の礫石の幅いっぱいに高さ0.7mまで積み上げている。本來はもう少し高かったと考えられる。

閉塞石から南側の羨道部には灰黒色土が厚く堆積しており、その厚さ約0.3mを測る。この灰黒色土は石室外にも広がる様相を示していたため、羨道の壁石がなくなる地点に南トレンチを設定してその断面観察を行なった。その結果、現地表面から約2.5m掘り下げても地山のマサ土には達せず、灰黒色土の下では西トレンチにおいて旧地表とした淡褐色砂質土層を検出した。ここでも西トレンチ同様、淡褐色砂質土層は旧地表と考えられるが、幅約2.3m、深さ約0.5mの断面皿状に掘り込まれていた。灰黒色土はこの掘り込みに堆積している。南限は未確認であるがさらに南側に統いており、墓道ではないかと推定される。羨道から続くこの灰黒色土には玄室同様多くの鉄滓、土師器片、須恵器片を包含している。

出土遺物

須恵器 (Fig.27, S-42~44)

すべて羨道部より出土したものである。玄室内からはわずかな土器片が検出されているが、復原不可能な細片のみであった。S-42は横瓶で破片のため長径方向は図示できなかった。口

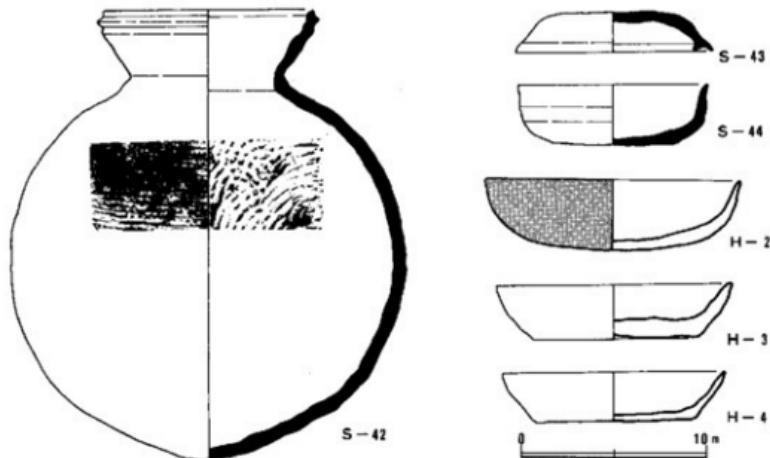


Fig.27 第8号墳出土土器実測図 (縮尺1/3)

径11.0cm、胴部最大径21.2cmを測る。頭部と胴部にはつぎ目がみられる。頭部は短くヘラによって成形されている。頭部から胴部にかけては叩きによる成形痕がみられる。内面にも叩き目が認められる。器壁の厚さは0.8cmである。S-43は环蓋で口径10.7cm、器高2.2cmを測り、小形の扁平なものである。口縁部のかえりは矮少し、受け部と同位になっている。ヘラによる成形も粗雑である。S-44は环身で底部から大きく丸味をもって口縁まではほとんど垂直に立ち上がっている。底部にはつぎ目が残り、ヘラによる成形はほとんど見られず粗雑である。口径10.3cm、器高3.2cmを測り、焼成は悪くてもろい。

土器器 (Fig.27、H-2～4)

H-3、H-4は坏、H-2は柾である。H-3は口径12.5cm、器高2.6cmを測り、糸切り痕を明瞭に残す底部から外反し、口縁部付近でやや内傾する。茶褐色の器壁は薄く器面は粗い。H-4は口径12.7cm、器高3.0cmで、器壁は厚く茶褐色の器面は粗い。底部は糸切り痕を残す。H-2は良質な胎土をもちいて成形され、器面の調整はヘラ研磨により全面に丹塗りされている。口径14.9cm、器高3.9cmを測る。

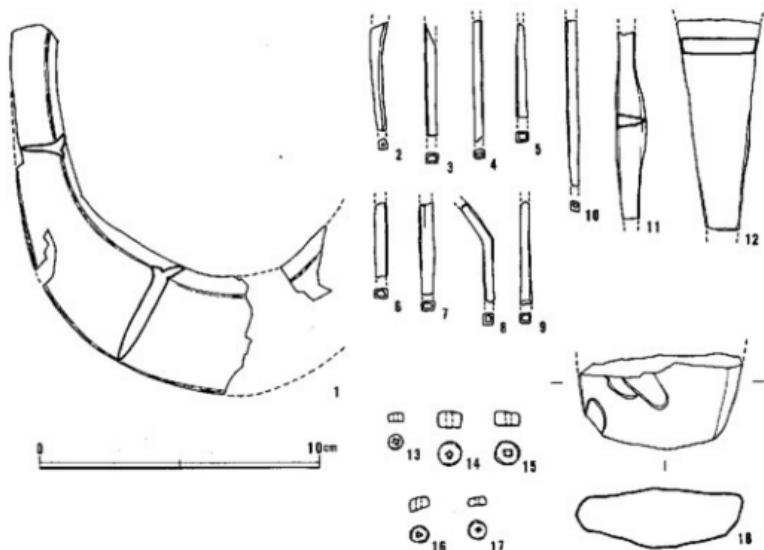


Fig.28 第8号墳出土鉄製品、玉類、石器実測図 (縮尺1/2)

鉄製品 (Fig.28、1~12)

鋏先 (1)

玄室内西側壁寄りに他の遺物と混在して出土した。半分は欠失しているが、はめ込みの段も明瞭にみられ、復原すると身幅約1.6cmになる。刃先の最大幅は4.3cm、末端幅は1.7cmである。終末期古墳からの出土は特異なものである。

鉄鎌 (2~12)

図示したもの以外を含めて10点以上検出されたが、すべて茎部のみであるために正確な本数は不明である。細い茎部のものは0.3~0.4cmで、断面は四角の管状をなしている。12は方頭広根斧箭式の鎌であろう。

玉類 (Fig.28、13~17)

鉄製品と同じく玄室内より出土した。すべてガラス製小玉であり、Tab. 3に記すとおりである。

Tab. 3 第8号墳出土玉類計測表

単位：mm

No.	種類	材質	澤	長さ	孔径	色調
13	小玉	ガラス	2.30	1.50	0.70	ブルー
14	〃	〃	4.00	2.40	1.00	ブルー
15	〃	〃	3.65	2.15	1.15	ブルー
16	〃	〃	3.00	1.50	1.00	ライトブルー
17	〃	〃	3.00	1.50	0.50	グリーン

石斧 (Fig.28、18)

墳丘の盛土中より出土した玄武岩製の太形蛤刃石斧である。刃部のみの欠損品で、両面から研磨され仕上げられている。今山産の石斧と考えられる。

4. ま と め

七隈古墳群 8 基の内、実際に発掘を行なったのは 3 基のみであり、他の 5 基は未調査のまま破壊された。したがって、古墳群形成の過程を把握することはできなかった。さらにまた、古墳 1 基を 1 個の完結した遺構として把える問題意識の希薄性、発掘法や発掘期間の限界性などにより、個々の古墳についても十分な調査成果を得たとはいえない。その中で得られた結果を要約してまとめとする。

1. 第 5 号墳の埋葬施設および外部施設の構造は不明であるが、出土した 1 ~ 3 群の須恵器は墓前祭祀の供獻用と考えられる。环の型式は A ~ C 類が III a 期、D 類が III b 期であり、6 世紀中期 ~ 後半の年代が与えられよう。橈乱層中より出土した S-29 は、蓋にかえりをもつ型式であり、年代は下降する。第 5 号墳の造営は 6 世紀中葉に始まり 7 世紀まで継続すると考えられるが、その具体的なプロセスは不明である。

2. 第 6 号墳も破壊を受け、石室構造の一端を明らかにしたにすぎない。石室の構造は、巾広の長方形プランの玄室に、狭小な羨道を付設するもので、横口式石室が発展した形態の初期横穴式石室である。出土した須恵器は少量であるが、III a 期、III b 期のものであり、第 5 号墳の年代と同様である。

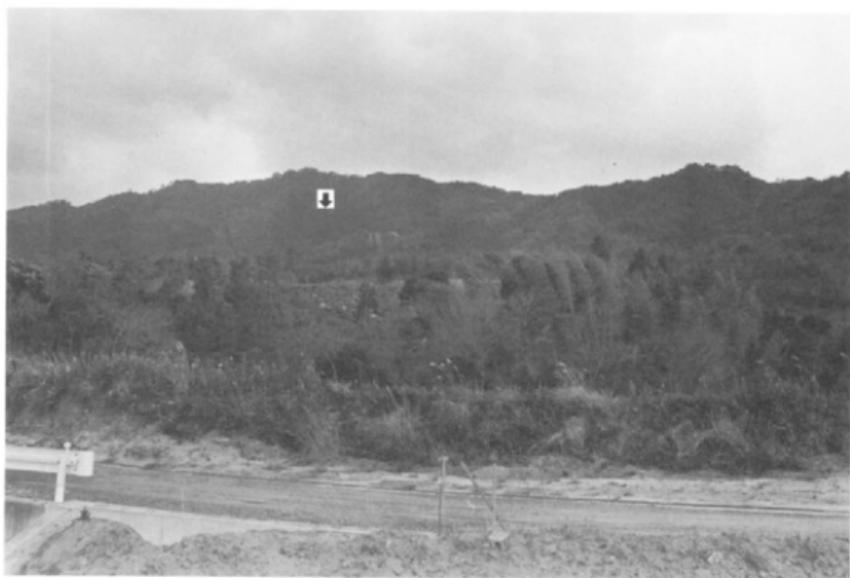
3. 第 5 号墳と第 6 号墳は、低平な丘陵先端に 100 m をへだてた位置関係にあり、相前後して築造されている。七隈古墳群中では最も早い時期の造営と考えられる。

4. 第 8 号墳は丘陵勇部斜面に築造され、正方形プランの玄室に狹長な羨道を付設する横穴式石室をもち、第 6 号墳より後出する型式である。出土土器の量が少なく、年代決定は困難だが、7 世紀代の築造と考えられる。本墳の最大の所見は、玄室内および羨道・墓道に多量の鉄滓と灰黒色土が認められたことである。U 字形鋤先の出土とともに、本墳被葬者層の性格の一端を示すものであろう。

5. 七隈古墳群は、西油山から東油山の北麓一帯に分布する後期古墳群の中で最も早く形成された一群である。この形成が種井川流域地帶の水田開発の進展のみを背景にしたとは考えられず、第 8 号墳に示されるように製鉄等の他の経済的基盤をも視野に入れて解明してゆかねばならない。

- 註1 福岡市教育委員会「相原古墳群」 1974
- 註2 福岡市教育委員会「鹿永アヲ古墳群」 1980
- 註3 鹿添古墳調査会「千葉縣古墳群」 1985
- 註4 倉瀬戸古墳群調査団「倉瀬戸古墳群」 所収
- 註5 福岡市教育委員会「鳥越・七隈古墳群」 1985
- 註6 福岡市教育委員会「大谷古墳群II」 1985
- 註7 昭和58年福岡市教育委員会が発掘調査を実施。山崎祐男氏よりご教授。
- 註8 福岡県教育委員会「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」第5集 1978
- 註9 鶴川町教育委員会「誤音山古墳群」 1982
- 註10 福岡県教育委員会「九州新幹線自動車道関係埋蔵文化財調査報告XIII」 1978
- 註11 福岡県教育委員会「九州新幹線自動車道関係埋蔵文化財調査報告XIV」 1977
- 註12 石棺系石室とは、「箱式石棺を母胎に整穴式石室の技法を導入した構造」で「九州の伝統的墓制たる箱式石棺を母胎とし、その系譜を引く事は構築法から認められる」もので、箱式石棺→石棺系石室→整穴式横口式石室という系譜を辿ることができると言わわれている。
- 註13 小郡町教育委員会「津古内塙遺跡」 1970 小郡町教育委員会「津古内塙遺跡第2次」 1971
- 註14 福岡県教育委員会「九州新幹線自動車道関係埋蔵文化財調査報告」 1976
- 註15 福岡県教育委員会「若宮・宮田工業団地周辺埋蔵文化財調査報告」第3集 1980
- 註16 福岡県教育委員会「若宮・宮田工業団地周辺埋蔵文化財調査報告」第1集 1979
- 註17 福岡県教育委員会「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」第9集 1978
- 註18 福岡県教育委員会「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告4」 1984
- 註19 クボタハウス㈱、住友不動産㈱「城ヶ谷古墳群」 1977
- 註20 宗像市教育委員会「浦谷古墳群」 1982

図 版



(1) 鳥越古墳群遠景



(2) 笹尾山調査区全景



(1) 鳥越古墳 E 群 I 号墳地山整形の状態



(2) I 号墳石室検出状態



(1) 1号墳石室閉塞状態(石室内から)



(2) 1号墳石室閉塞状態(墓道側から)



(3) 1号墳石室及び敷石の状態



(4) 1号墳石室脇石の状態



(1) 1号墳石室奥壁の状態



(2) 1号墳石室北側壁の状態



(3) 1号墳石室南側壁の状態



(4) 1号墳石室奥壁腰石の状態



(5) 1号墳石室北側壁腰石の状態



(6) 1号墳石室南側壁腰石の状態



(1) 鳥越古墳 E群 2号墳



(2) 鳥越古墳 E群 2号墳地山整形の状態



(1) 笹尾山 花崗岩の礫群（模跡をもつ）



(2) 出土遺物



(1) 第5号墳遠景(東より)



(2) 第5号墳近景



(1) レンチ発掘状態（西側）



(2) レンチ発掘状態（東側）



(1) 第2群および第3群須恵器出土状態（西より）



(2) 第2群および第3群須恵器出土状態（南より）







(1) 第5号墳より第6号墳を望む



(2) 第6号墳遠景（西南より）



(1) 第6号墳より第7号墳を望む



(2) 第6号墳発掘作業風景



(1) 案内図の概要と石碑



(2) 羨道部および須恵器出土状態



(1) 美道部および墓道完掘状態（北より）



(2) 石室完掘状態（西より）



(1) 第 8 号 墓 遠 景 (南より)



(2) 第 8 号 墓 発 掘 前 の 状 態



(1) 第8号墳発操作風景



(2) 第8号墳石室裏込め状態および振りかた



(1) 第 8 号 墓 玄 室 遗 物 出 土 状 态



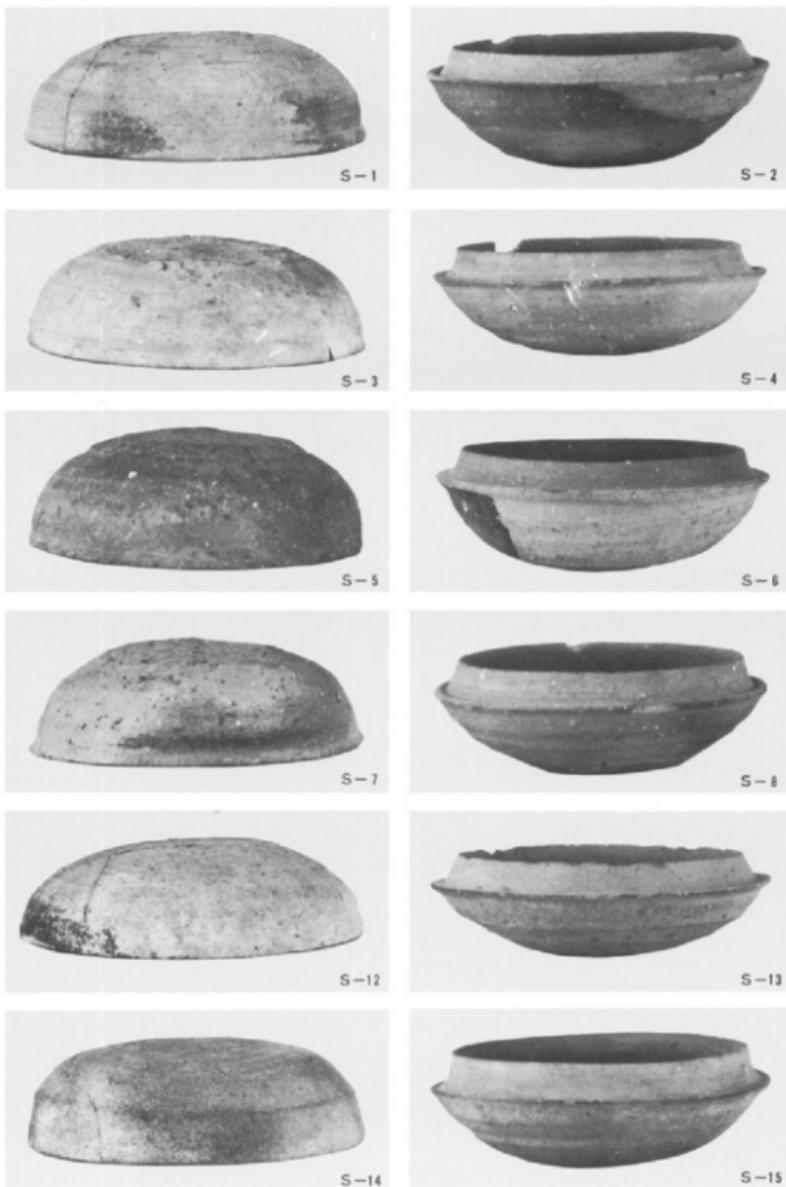
(2) 第 8 号 墓 羹 道 部 遗 物 出 土 状 态



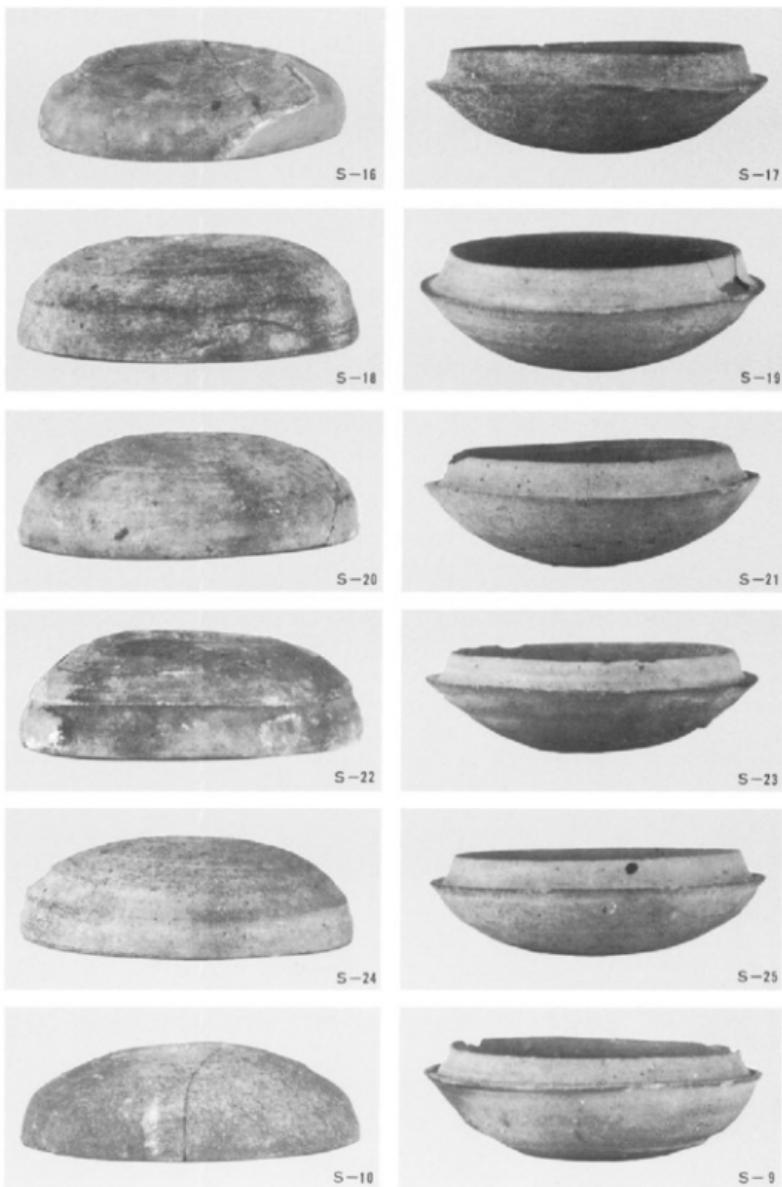
(1) 第 8 号 墓 石 室 完 损 状 态



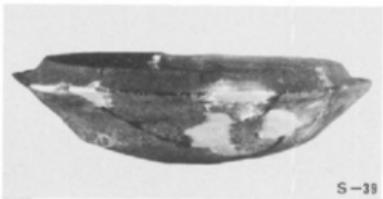
(2) 第 8 号 墓 石 室 暗 道 部 の 状 态



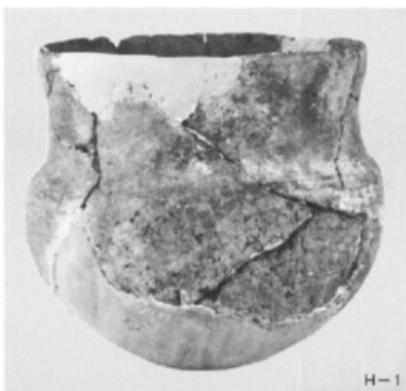
第5号填出土須恵器(I)



第 5 号 墓 出 土 鎏 惠 器(2)



第 5 • 6 号 墓 出 土 須 惠 器



第5号墳出土土器

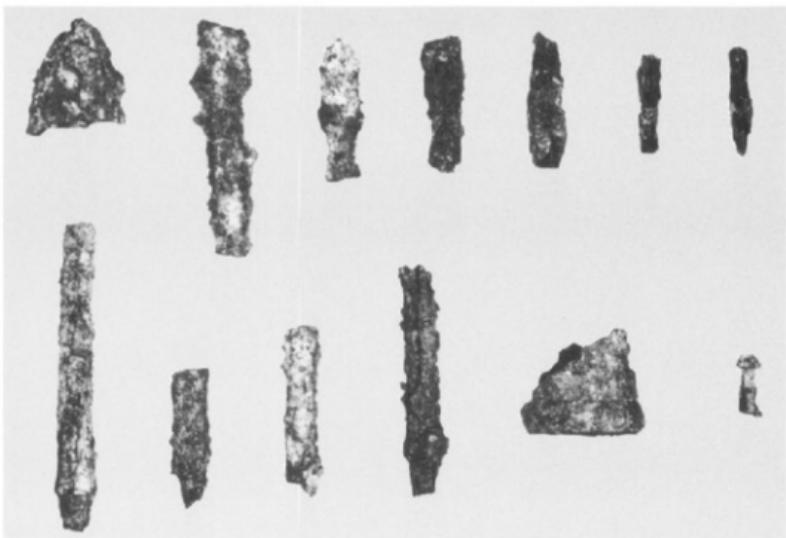
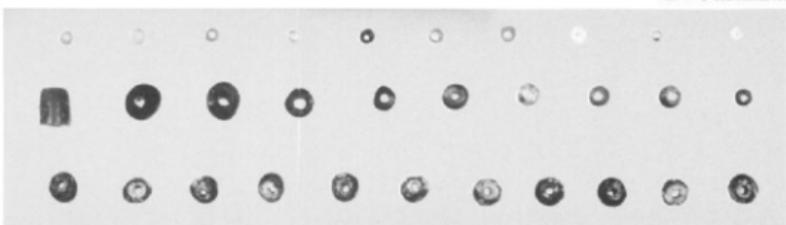


第4号墳出土金環

第6号墳出土玉類



第5号墳出土玉類



第4・5・6号墳出土土器、金環、玉類、鉄製品

第5号墳出土鉄製品

1

2

3

